

も中々の高山にて、大木鬱蒼として生ね茂り、誠に有難き靈場でございませぬが、況して文覺の参りました時分には、深山古木森々として生ね茂つて物凄いとこの境内、其の本堂の前まで参りますと、唯何んとなう有難く、自然に頭も低ります、文覺は珠數サラ／＼と採み立て、

文覺「拜みまするは觀世音、何卒文覺の願ひ、中々罪深き此身、御利益を以てお救ひ下し賜はるやう、我父母が一命を縮め、祈願を籠めて我れを授かりし由、夫れに我が身の過りより、一旦道を踏み迷うたる武者盛遠の成れの果、惑みたまへ、御眼尻を垂れたまふやう、偏に願ひ奉る、一生懸命でござりまする」

と、種々祈願を籠めました、何しても何の驗もござりませぬ、愛相を盡かして文覺は、
文覺「ア、情けない、是れほど祈願を籠めても、尙だ佛法の覺りを開く事は出来ぬか」
開きませぬのも道理なり、
更け行く空は丑三の、



草木も眠る其の頃に、
七日前から文覺と、
觀音經を唱へつゝ、
年齢は二八か二九からぬ、
瑠璃の頭を地に垂れて、
肩より後方に撫で下し、
唱へ居ります其の聲が、
思はず横合を見て、「ア、容貌美しい女もあるもの、七日前には氣の毒にも、何となう嫌な臭氣がして顔中に腫物が出来て目もあてられなかつたが、今此燈明の明りで能く見れば、ア、何んとも言へぬ美しい女ぢや、見れば見るほど其の横顔が、袈裟の容貌にさも似たり、ア、世が世であれば、京都に在つて、上西門院の北面の武士、一時の心得違ひより身は佛門に入りたるが、何んとしても佛の道が守られないとして見れば、最う佛法と云ふものは、世の中の愚昧の者を惑はす爲の拵へもの、ア、思へば世の中

せん、卒いざ斯かう參まられよ』
と、側に近寄つて、女の手を執らんとする、此時早く彼時晚く、文覺の手が女の肩へ掛かつたかと思へば、

女「ヤッ」

と叫んだ一聲に、アレ——ツと云ふ間もあらばこそ、肩に乗つたる文覺は、さしもの高き舞臺の端より、何十丈とも分らぬ谷底に、ビユツ——ツと投げ附けられた、其身はキリツ、キリツ、キリツと廻つて落ちる、落ちる途中、木の根や岩角に身躰が當り、谷間を流る、水際にビシヤツと落ちた、其儘息は絶わたかど、

思ふ間もなく白々ど、

朝日の影の明かに、
偶と目を覺まし文覺は、
是は开も如何に是は如何に、
朝日耀くお扉を、

早や明け染める東雲に、
鳥の啼く音が耳に入り、
四邊静かに見渡せば、
元の本堂の御前にて、
サツと開いた御内に、



ピカツと光る觀世音、
音樂の響き最と涼やかに耳に入る、
見上げる空に不思議やな、
如何に文覺汝が願望届きしが、
以後は必ず慎んで、
今より熊野へ立越えて、
瀧にて荒行いたすべしと、
次第々々に薄くなる。

ア、有難やと見るうちに、
夢かとはばかり文覺は、
紫雲棚引く其の中より、
未だ女犯の障りあり、
佛の教へ守るべし、
那智の深山に立籠り、
言ふ聲さへも最と微か、

ハツと驚き文覺は、
文覺「ヤレ、勿体なや、觀世音、主ある女を手につけた、其の罪障を拂ひ清めぬ其の上に、再び女に手を掛くと致したる淺猿しさ、今日只今までの心を改め、此の文覺の兩眼は、佛を拜むのと衆生の難を助ける爲め見るより外は、誓て昨夜の如き心動きは仕りませぬ、尙此上の御加護を偏に願ひ奉る」

餘りの嬉しさに、其日一日は當長谷寺の本堂に在つて身を清め、禮拜を致し、是れより御寺の坊へ参り、七日の間祈願を致して、身体の疲れもあれば暫く養生の上、再び長谷寺を後に眺め、熊野の那智の荒瀧へ急がんとすれば、

是れも佛の御利益か、

行く先々で人々が、

當時平家の清盛は、

奢り増長極めしゆる、

上は一天萬乗の君の勅命に従はず、

下萬民の苦みは一方ならぬ有様と、

耳に這入れば文覺は、

穩かならぬ此の一言、

尙も續いて聞かばやと、

進み寄るとは知らずして。

○「オイ」

△「何んだわ」

○「大きな聲ぢやア言はれないが、此頃は平家の大将清盛と云ふ人は、我が儘の振舞をして、上も下も餘り苦めし爲め、勤王無二の大納言成親と云ふ人は、平判官康頼を力と憑み、攝津國は多田の領主、多田藏人行



綱と云ふ源氏の大將に、平家追討の相談を致し、行綱と云ふ人は勅命と聞いて、畏つてお請けに及び、領國の攝津に歸つて、一門を集めて相談をしたところが、平家の勢ひは朝日の昇るが如く、夫れが爲に清盛に睨まれて、源氏の藏人は危く、折角御國の爲に旗揚げをしようとした者も、清盛の方へ洩れ聞けたので、清盛と云ふ大入道は怖ろしい目を剝いて、大納言成親卿を首めとして、平判官康頼、丹波少將成經、俊寛僧都等、勤王無二の人々を召捕つて、船に乗せて鬼界ヶ島と云ふ怖ろしい處へ、流しものにしたさうだ、夫れが爲に京都の騒ぎ一方ならず、此様な清盛のやうな悪い坊主に政治を預けて置いた日にやア、夫れこそ國の内は暗闇になる、困つたものぢやアないか」

と話をして居るのを、耳に致した文覺は、
文覺「ム、ウ、是れも靈驗著しい觀世音の御利益、御國の爲に働いて、清盛を討つてこの事に相違あるまい、此上は袈裟の菩提の爲ばかりではない、彌陀の利劍は逆賊清盛を討つべき太刀なり、今より熊野の那智の瀧に参



★文覺の荒行

一九六

り、荒行を致し、十二社大権現の御利益を以つて、悪魔退散、逆賊清盛を祈り殺して呉れん」
 然うちやくと文覺は、
 山また山を踏み分けて、
 補陀洛山は唐土の、
 うつして茲に御熊野の、
 三國一の荒瀧と、
 水に打たれて荒行して、
 五穀成就御代萬々歳、
 世にも名高い文覺荒行の一卷は、

大和國を後に見て、
 夜を日に續いで紀伊國、
 岸打つ浪を其儘に、
 那智の御山に來て見れば、
 庶人も稱へし瀧壺の、
 悪魔降伏國家太平、
 清盛調伏の祈りをすると云ふ、
 チヨツと一息次ぎの段。

(其の二)

さても文覺上人は、深山幽谷を巡り居りますから、山路を歩くことは馴れて居りまするが、さしも峻しき大和國、吉野郡は十津川越、越えて急ぐ



は御熊野の、十二社権現の膝元、本堂に詣で、此處で七日の間祈願を籠めまして、其れより當權現堂を後に見て、日本一の荒瀧を志して急いで参りました。

頃しも冬の中半頃、
 枯れし梢に花咲きて、
 下る氷柱は劍の如く、
 峰より落つる瀧水は、
 百雷頭上に落つるかど、
 流石剛氣の文覺も、
 二足三足後退り。

那智の御山に來て見れば、
 つらなる山は白妙で、
 肌さへ破る深山路の、
 岩に響いてゴウくと、
 思ふばかりの那智の瀧、
 思はず知らずタジくと、

心弱しと氣を取直し、再び近寄る瀧壺の側、岩角に手を掛け、氷の上を滑りながら、近寄らんと致しまするが、中々日本一の荒瀧なれば、容易に側へ近寄る事能はず、見上げる空へ白布を懸け下したる有様に、バチバチ——、落ち來る水は峨々たる岩石に當つて、朦朧として霧の如く、夏

★文覺の荒行

一九七

尙寒き瀧の下、況して冬の中半なれば、吐く息、引く息、自由ならず、齒の根も合はずガタ／＼、慄ひ、覺束なくも、一足歩み、二足歩んで、ズルツと滑り、漸く瀧壺より吹き上る水際まで近寄りました、尤も腹には荒縄を巻き立て、墨染の法衣を纏ひ、頭は刺栗の如く、鬼髭を左右に生やしたるは、針を植ゑたる有様にて、八萬四千の毛孔は逆立ち、唇の色は眞蒼となり、水晶の珠數を左手に掴み、右手には獨鈷を握り、水際に身軀を浸し、慄へる聲を張り上げて、

文覺「大日大聖不動明王、歸命頂禮六根清淨、何卒御利益を以て、天下太平、五穀成就御代萬々歳、奢る平家怨敵退散、惡魔外道の清盛降伏なさしめたまへ、大日大聖不動明王」

と重て唱る其聲も、次第々々に弱り行く、然う斯する間に、落來る瀧は、ゴオー、ゴオー、ゴオー、ウ、ザア、ザア、ザア、ツと、一旦瀧壺に落ち込んで、渦を巻いて吹き上げる、疲れ果てたる文覺の身軀は、其の水勢の爲にダダダッとし出し出だされる、夫れをも厭はず、一心

不亂に相成つて、不動經を唱へて居りますうちに、

次第々々に身體は凍り、

合掌なしたる其儘に、

口に出すべき聲もなく、

尙も祈念を凝らし居る。

哀れ文覺は何時の間に、人事不省に相成りまして、唯水に打たれて、下へ

と身體は流れ行き、岩角に止まつて居りますうちに、

人も途絶わたり山の奥、

實に怖ろしい谷間より、

柴を背中に背負はれて、

既に人事不省となりました文覺の身體を瀧壺より引き上げて、焚火を致して

煖める、其の煖味が身に徹つたと見えて、文覺は、ム、ンと一聲蘇つた、

慄へる聲を張り上げて、

文覺「ヤア如何なる山鬼魍魎なるか、我が願望の妨げする奴は、我が行力

に依つて祈り殺して呉れん、何奴なるか』と、
 手足は自由にならねども、
 腕み附けんとしたなれば、
 夢かよばかり文覺は、
 身を躍らして飛び込まん、
 アラ怖ろしき物音は、
 唸りを生じて物凄く、
 激しき震動の音共に、
 ビカリツと光る稻妻は、
 折柄一陣の玉風が、サア——ツと大木の枝を拂つて吹き下すかと思ふと、
 アラ不思議や、劍を飛ばすばかりの、大雨は、岩をも突き貫く勢ひで、ザ、
 ザ、ザ、ア——と降り来る中に、満山破る、ばかりの震動と共に、何丈
 とも分らぬ高き瀧の上から、
 ガラ／＼ガラ／＼ガラツ、ズド——ン



と落ちて来ました大石が、今文覺の頭上へ正面に落ち掛かつて参りました、
 此時文覺は微懼とも致さず、苦笑ひ、
 文覺「イヤア、是れぞ全く山鬼廻廻のなす所爲に相違あるまい、能つく承
 はれ、山神の類ひ、斯く申す文覺は御國の爲や大君の爲に、奢る平家の
 大將清盛を祈り殺さんが爲め、斯く荒行を致す者なり、夫れに何んぞや
 願望の妨げを致すとは、是れ全く悪魔の所爲に相違あるまい、何處まで
 も我が願望の妨げを致すところあるなれば、悪魔退治の秘法を行ひ呉れん、
 夫れでも邪魔立てを致すか、悪魔龍王消えてなくなれ、怨敵退散」
 と、立木も裂ける大音で唸鳴り附けようと思へども、斯る難行苦行の爲め、
 心は確かであるが最う聲も自由に出不す、覺束なくも辿り辿つてまた瀧壺
 の中へ飛び入らんとする時、忽ち大空より落ちて参りました岩石が、文覺
 の頭上へズド——ンと當つて、我が身軀は粉微塵に相成つたかと思へば、
 ♡アラ不思議の次第なり、
 初めの激しき震動も、
 忽ち止みて空は晴れ、
 晝尙暗き瀧壺も、



文覺の荒行

赫々たる四邊眩き光明と共に、
 紫雲棚引く其の中に、
 忽然として現れたまふ不動明王、
 明王「善き哉、善き哉、文覺、能く承はれ、汝の願望届いたり、また行徳に依つて、清淨無垢の身上と相成る、最早此上は汝が望みの通り、奢り極めし平家を追討に及んで、上は天子の宸襟を安め奉り、下万民の苦みを助けるは、偏に汝の行徳に依つて叶ふべし、時節を待つて事を計るこそ宜けれ、依つて今より下山に及び、京都へ上り、高雄寺再建の願ひを以て、洛中勸進を致しなば、汝が一心成就する事疑ひなし、疾く下山に及べよ」
 と、お告げを受けて文覺は、
 文覺「アラ、有難や、尊や、我が願望を叶へたまひしか、此上は仰せの如く京都へ歸つて、高雄の神護寺再建の上、時節を待つて事を計らひ申すべし」と



文覺の荒行

洗ひ上げたる清らかな、
 以前に變る荒法師、
 花の京都へ分け上る、
 守護職をば勤めたる、
 是れ文覺の叔父にして、
 共にひそかにかたらひて、
 奢る平家を追討の、
 北條の郷蛭子島に配所の月を、
 左馬頭義朝の三男、
 これを與へたばつかりに、
 山より高き譽れをば、
 朽木隠れの大難に、
 久しく埋もれし白旗を、
 東海道を乗り出だし、
 身體となつて文覺は、
 那智の御山を後に見て、
 其頃院の御所に於き、
 遠藤美濃守重光は、
 忠義無類の武士なれば、
 御白河の法皇より、
 院宣賜はり伊豆國、
 眺めつ果敢なく暮し居る、
 兵衛佐は頼朝に、
 處も堅き石橋の、
 津々浦々に轟かし、
 續いて再び安房上總、
 隅田川原に押し立て、
 三國一の名山は、



＊文覺の荒行
 富士の裾野に陣を取り、
 流れも清き富士川の、
 驚かしたる勢ひは、
 伊達の郡は平泉、
 館に暫し身を潜め、
 名を改めし義経が、
 繰り出だしたるばかりに、
 入り亂れての大合戦、
 君の爲なり、國の爲め、
 名僧文●上人が、
 斬るべき太刀に用ゐたる、
 先づ是れにて読み終る。



二〇四
 然も平家の六萬を、
 其の水鳥の羽音にて、
 黄金花咲く陸奥國、
 御館権太郎秀衡が、
 時節を待たれし牛若丸、
 兄頼朝に味方をせんと、
 是れより源平兩軍が、
 文覺の難行苦行の功現れ、
 天下治めた日本一、
 彌陀の利劍も逆賊を、
 美久仁の花の一卷は、



(七) 俠骨一心太助

(其の二)

國亂れては豪勇の、
 夫れ我が國も應仁の、
 百有餘年の其の間、
 解く由もなき戰國の、
 光りは四方に輝きて、
 是れ豊臣の秀吉公、
 向ふところ敵はなく、
 千成瓢も束の間、
 武家の長者の三代目、
 諸行無常の響あり、

＊俠骨一心太助

現れ出づる例として、
 細川山名の合戦より、
 天下は麻と亂れたる、
 空に現はる太白星、
 徳を四海に漲らす、
 武名天下に轟きて、
 吹いて靡かぬ草もなき、
 榮枯は夢か幻か、
 祇園精舎の鐘の聲、
 星現れて又隠る、

二〇五

例しに漏れず豊臣を、
三百年の太平を、
是れぞ徳川家康公。

討ち滅ぼした其の上で、
引き出したる其の人は、

さて元和の元年七月十日の未明、流石に堅き石山の、鞍形城もゆるぎ行く、
時來りては詮もなし、茲に徳川家康公、二代將軍秀忠殿百萬人の大軍を、
引率いたして浪花津の、四方八方取圍み、數度の合戦せし上に、平野の郷
の大念佛寺を、御本陣にと定められ、一ト時攻めに致さんと、構へしこ
も如何にせん、大阪方の大軍師、眞田幸村の方畧に陥りて、危きことの數
々も、お側に從ふ忠臣で、大久保彦左衛門を首めとし、三河以來の旗下の
人々、主君を救ひ參らせて、其の危きを脱れて、東の方に落ち延びて參り
ました、ところへ二代將軍秀忠公は御伺ひ申上げられ、鍋島の陣中に於て
御介抱いたして居りますうちに、前席にも申上げましたる通り、槍持中
根源次郎は、秀忠公の御秘藏の天の九郎利長の槍を持つて、平野の郷の燒
討の戦場の跡を見物いたし、出世の手蔓に有り附かんと出掛けて參りまし

たのが身の災難、大阪方で名も高き、眞田左衛門尉幸村の老家、海野六郎
右衛門に行き合ひ、切めて此の人を首に致したなれば、我が出世の端緒と
思ひましたゆゑ、敵はぬとは知りながら、狙ひを定めて六郎右衛門の脇腹
を望んで突込みました、此時海野六郎右衛門は、中根源次郎の突き出した
槍の千段巻きを掴んで、グツと手許に引き寄せ、

六郎「ヤア、何者なるか」

源次「恐れながら匹夫下郎の槍持奴にござりまする」

六郎「下郎の分際で、何ゆゑ以つて我れに槍を附けたか」

源次「只今容子を伺ひますれば、最早豊臣の運命を見限りたまひ、一命を
お棄てあそばすぞ云ふお覺悟の跡、夫れゆゑ御首級を頂けば出世の基と
存じ、槍を附けましたのは私の過り、何卒お助け下さりまするやう」
と、眞心を籠めて頼み入るを、聞いて海野六郎右衛門、

六郎「ム、ウ、不憫の至り、然らば拙者の首級を其方に得さす」
源次「ハイ、夫れは本當でござりまするか」

六郎「武士たる者が詐りを言はうか、我が首を斬つた其上は、住吉の陣中軍奉行の柳生但馬守に申出で、必ず首を打つたと云ふやうな、詐りを述べてはならぬぞ、貰らうたと云へば、三千石や五千石に成れるは必定、世出いたした曉は、今日を命日と心得て、我れ亡き後の吊ひを汝に頼み入るぞよ」

源次「委細畏りましてござります」

六郎「然らば今より切腹に及ぶ、卒ぎ後方へ廻つて介錯に及べ」

と、黄金作りの陣刀を執つて、中根源次郎に渡す、源次郎の悦びは如何ばかり、後方に廻つて介錯に掛かる、芝生の上に座を設けたる六郎右衛門は、具足を除つて兩肌押し脱ぎ、大阪城の方角に向ひ、兩手を合はせ、南面山鞍形城に在します御大將、秀頼公に餘所ながら御暇乞ひを致し、涙と共にお別れを申上げ、腹揉み立て、解手刀を抜き、

源次「卒ぎ源次郎とやら、介錯に及べ、武士が最期の辭世の一首、必ず忘れずに覺わて置け、

夢の世の夢の旅路に見し夢も

今日覺め果て、歸る古郷」

と、流石は海野六郎右衛門、怯れた様もなく、解手刀を左の腹へブツ——りと立て、ム、——ツと引き廻せば、源次郎は後方へ廻り、南無阿彌陀佛諸共に、

源次「エイッ」

と掛けたる一聲に、六郎右衛門の首級は前に落ちる。

源次「ヤレ、勿体なや、海野様、私が出世をした上は、貴方は我が家の守護神とお祀り申上げます」と、

お詫び仕ながら血を拭ひ、

鎧兜や槍刀劍、

大事の首級を背に負ひ、

卒ぎ住吉の御本陣、

出世いたした其の後は、

海野の首級押し頂き、
海野の馬に結び付け、
死骸は茲に埋め置き、
軍奉行へ名乗り出て、
馬に打乗り槍立てさせて、



※ 俠骨一心太助

二一〇

故郷に歸る錦ぞと、
馬の背中へ掛け流し、
急がうとすれど後髪、
死骸埋めた近邊をば、
斯くては果てじと氣を取直し、
焚火は我れの道導

勇む心に染め手綱、
右手に轡を執りつ、も、
引かる、思ひ振り返り、
少時眺めて居たりしが、
遙かの方に燃ゆる上る、

卒に歸らうと堺口、住吉指して行かんとすると、折柄後の方よりも、

○「中根源次郎、待てッ」

と呼び止められて源次郎は、寢耳に水の有様で、ハッと驚き後振り向き、

源次「何人様でござります」

○「誰でもない身共だ」

源次「オヤ、組頭の河勝様でござりまするか」

○「オ、如何にも儀右衛門だ、残らず容子は彼れに隠れて聞き及んだ、
サア汝が貰つた其の首級から、馬も具足も残らず此方に渡せ」



源次「ハイ、とはまた何ゆるでござります」

儀右「何んでもない、汝ごときが立派に出世を致し、肝心組頭の拙者が、
指を啞へて見て居る事は出来ぬ、四の五の言はず渡して丁へ」

源次「是れは仕たり、組頭、夫れは御無理でござります、組下の者が出世
をすれば、悦んで下さるこそ武士の情け、夫れに功名を横奪りせんとは、
餘りの事でござります」

儀右「エ、四の五の言ふには及ばぬ、其處動くな」

と言ふより早く、腰なる一刀に手が掛かつて抜いたかと思へば、ピカツと
光る劍の電光、空は磨る墨を流した有様、星の明りもなければ、微かに
燃ゆる明りで、ヤツと斬り込む太刀の下、是は「一大事」と、源次郎も同じ
く刀を抜き放つて、二太刀、三太刀、チャン、チャリン、受けつ流しつ働
いたが、我れより優る強敵に、防ぐ力も何處へやら、受け太刀、引き太刀、
流れ太刀、唯ヨロ／＼と蹣跚く奴を「得たり」と河勝儀右衛門、大喝一聲
大袈裟斬り、ザク／＼斬り下した刀は、正面に肩口から乳の下かけて、

※ 俠骨一心太助

二一一

斬り下げられ、ドツサリ倒れた源次郎、恨みの顔色血を濺ぎ、齒を咬み鳴らして、片手は大地に片手を挙げ、

源次「汝れッ、憎き河勝儀右衛門、人に恨みのあるものか、ないものか、思ひ知らさで置くべきや、ム、——ン」

と、睨み附けたが此世の別れ。此方は河勝儀右衛門は、

儀右「エ、四の五の言ふには及ばぬ」

と、止息の刃を刺しまして、殷血を拭つて鞘に納め、死骸に石を縛り附け、將軍の鎧諸共に、池の中へザンブリ投げ込んで了ひました、莞爾笑つて塵打ち拂ひ、

儀右「サア、馬よ、中根源次郎に伴られるよりは、乃公が貴様を伴れて行けば、中根に優る功名、出世を致した其上は此方の乗馬にして遣る、サア来い」

と、燕轡を執つて、

儀右「アイ、アイ、アイ」

と、二足三足歩まうとすると、またも後の森蔭より、立木も裂ける大音聲の

△「戦場の泥棒、待て——ッ」

と、呼び止められた儀右衛門は、ピクツと致して後振り向き、

儀右「エ、見咎められたら最う是れまで、何奴此奴の用捨はない、斬つて斬つて捲り、脱れるだけは脱れて見ん」

と、身構へ致した其のところへ、刀の柄に手を掛けて、タタタタと現れ出でたる一人、見るより儀右衛門は、

儀右「ア、今呼び止めたのは何者か」

△「されば餘人にあらず、身共でござる」

儀右「オ、何者かと思へば、我が組下の林善助ではないか」

善助「如何にも林善助なり、只今容子を見て居つたが、中根源次郎の功名を横奪りして、自分の手柄と致さんとは、武士にあるまじき振舞なり、サア源次郎の敵、御身の首級を頂戴いたさん、お頭たりとて赦しては措

かぬ、其處動くなッ』

と身構へを致して斬り込んで来ようとする。

莞爾笑つて儀右衛門は、

斬り来る林善助の、

急くな騒ぐな周章るな、

汝ごときの手には掛かり、

飛んで火に入る夏の虫、

拙者の言ひ條に附いたなら、

何んと拙者の言ひ條に、

所存はないか善助と、

此方は林善助『何を小頼』と身を跳き、

刀を執つて斬り附けようとはして

見ましたが動かれない、其の身は普通の腕前なれど、河勝は眞影流の玄妙

に渡りました腕前、到底も斬る事思ひも寄らず、そこで心曲つた林善助、

善助『言ひ條に附くとは如何なる事ぢや』

躰を捻つて籠手下潜り、

利腕確乎と捉へて、

日和續きで塵埃が立つ、

撃たる、やうな身共ぢやアない、

危き振舞いたさうより、

其方も諸共出世の手蔓、

附いて諸共名乗つて出る、

心有り氣のその言葉。

儀右『されば戦場で貰ひ首を致しても、三千石や五千石は目前頂く事は必定だ、確かに貰つたと云ふ證據人がなくては功名にならぬから、拙者の貰つた事を、其方證據人となつて呉れ、さすれば、千石貰へば五百石、萬石貰へば五千石、ザツと仕事は二つ割り』

善助『エ、ッ』

儀右『イヤサ……』

『表面は拙者の家来と致し、

善きも悪しきも兩人連れ、

お寺開くか緋法衣着るか、

生死の境は今此處だ、

腕首取つて押へ附け、貧乏搖ぎもさ、ずに締め附けた。夫れ故に素より林

善助も立派な武士にあらず、心曲つた奴なれば、

善助『夫れでは貴方の言ひ條に附きまする、何様な出世を致しても、内實

は二つ分け、夫れを間違へて下さるな』

☆ 俠骨一心太助

二一五

其の内實は兄弟分、

馬に乗るのか槍擔げるか、

死ぬか生きるかサア林、

心定めて返答せよ』と。

腕首取つて押へ附け、貧乏搖ぎもさ、ずに締め附けた。夫れ故に素より林

善助も立派な武士にあらず、心曲つた奴なれば、

善助『夫れでは貴方の言ひ條に附きまする、何様な出世を致しても、内實

は二つ分け、夫れを間違へて下さるな』

☆ 俠骨一心太助

二一五

巖右「ム、ウ、滅多に間違ふ氣遣ひはない」
善助「然らば私はお供を仕ませう、首級は貴方がお持ちあそばせ、私が馬を牽きませう」と、

急いで来たのは住吉の、柳生但馬守様の、齒に絹被せて飾り立て、其の證據人は善助と、兩人の名前記されて、恩賞の沙汰を致すべし、受けて兩人は悦んで、歸りながらも苦笑ひ。
巖右「巧く行つたぞ、善助や」
善助「大丈夫でござらうかな」

悪人兩人打ち連れて、軍奉行を勤めたる、御膝下となりぬれば、首級を貰うたのは河勝で、功名見立ての臺帳へ、天下治めた其後に、下り居れどのお言葉を、陣中出で、スタ〜と、

と、言はず語らず悦んで、其儘己れが持場へ引上げました。

さて然う斯うするうちに、元和元年五月七日、ドツと寄せ来る敵軍は、南面山は鞍形城、ドツと揚げたる鯨波の聲、大阪城の本丸も、煙に巻かれた人々は、捕らはれ人も數知れず、心あるべき人々は、二度の旗揚げ樂みに、中にも真田幸村は、勝間の浦から船出して、島津を指して落ちて行く、

✽ 俠骨一心太助

早や明け初める東雲に、さしもに堅き石山の、十重よ二十重と取圍み、鼎の沸くが有様で、火の手と共に落ちにける、周章狼狽そのうちに、討死するも數多あり、一方の血路を斬り破り、落ち行く人も數知らず、秀頼公を守護いたし、朝日將軍薩摩なる、ア、世の中は烏羽玉の、

夢か現か味氣なや、
人榮わてはまた沈み、
さしも榮わし豊臣も、
世は徳川の水清き、
治まる御代ぞ目出度ける。

國興りてはまた滅び、
飛花落葉は目前、
榮華の夢の覺め果て、
其の源に浪立たず、

二代將軍秀忠公も、戰場取片附けを濟まし、江戸へお引上げに相成りまし
た、慶長十九年より元和元年に至る數度の戦ひに功名ある者は、一々軍奉
行を以て、恩祿を取らせる事に相成りました。

茲に河勝儀右衛門は、海野六郎右衛門の首級を貰つた功名に依つて、新地
五千石、名は河勝丹波守を許され、旗下の歴々に加へられ、お役は天下の
大目付、貰うた屋敷は駿河臺、然も三下の御異見番、大久保彦左衛門忠教
殿のお屋敷と、高塚一つが境界の、隣屋敷に住居をなし、實に立派な構へ
をして、役向に依つて先を拂はせ「エ、寄れね、寄れッ」と歩く程の身上
となりました、夫れが爲に召使ひの家來の者も數多あり、勤める役が大目

付だから、賄賂袖金は數知れず、媚び諂ふ人々は門前市を成すばかり、晝
夜淫酒に耽つて、容貌美き者を右左に侍べらして、榮耀榮華を致して居り
ました。

さて轉る話は神田橋の御門内、足輕長屋に待ち受けた、中根源次郎の女房
のお豊を首めとして、お百、お縫の兩人の娘、

今日こゝろは所夫のお歸りか、明日は阿父様お戻りかど、

指折ゆびさり數へ親おやご子こが、待てご暮せご源次郎は、

行方ゆくへも知れず沙汰さたもなし、また戰場せんじやうで討死うちじを、

したる死骸しかいも現あられず、尋ねる術すべも泣き暮くし。

折柄せがら天下てんかの役人やくにんより、「中根源次郎、戰場せんじやうにて將軍家の鎗やりを持つて、逐電ちくでん
たした大罪だいざいに依り、妻子さいしの者重罪じゆうざいにも及ぶべきのところ、御憫愍おんみんを以て、
家財けざい召上げ、追放おしなげ申付くるものなり」と、嚴しい御沙汰ごさたになりました、

哀れあはれ母子ぼしの三人さんにんは、憑みの綱つなも切れ果て、
浪なみに漂たふふ捨すて小舟こぶね、何處どこへ取り着つく島しまもなく、

行方定めぬ落人の、

彼方に一夜此方に二日、
落ちて来たのは飯田町。

昔の馴染を便りつゝ、
茲に中根源次郎とは眞の兄弟同様に交りをした、八百屋久兵衛と云ふ者が
あります、其の人を便り、裏長屋を借り受けて、

細き煙の瘦世帯、
手馴れぬ業を頼まれて、
微かに一命を繋ぎ居る。

母子三人が共稼ぎ、
夫れに引替へ河勝丹波守は、晝夜淫酒に耽つて居りまするうち、彼の善助
の勧めに依つて、

善助「中根源次郎の妻子は、然々の次第で難儀を致し居る、彼れを彼の儘
にして置く時には、若し源次郎の恨みと云ふものが報い来て、我々の悪
事が顯れるやうな事があつては一大事、兩人の娘を召使つて、母親のお
豊には些少の仕送りを取らしては、如何でござる」

丹波「ム、ウ、夫れも宜からう」

と云ふので、廢せば宜いのに、昔の朋友棄て措けぬと云ふやうな、表面に

親切を飾り立て、林善助の取持で、兩人の娘を河勝の屋敷の奥附きの女
中として、上げる事になりました。

是れが爲に月々五兩の養ひ料をお豊の許に送り届けて居りましたが、何時
の程にか河勝丹波守は、姉のお百に手が掛かつて、其のうちにまた妹も、
自分の妾として、姉妹兩人を手活けの花、林善助は之れを見て、母親へ送
り取らせる五兩の金子は、貰ひに來ても碌々遣らず、兩人の娘も何時の程
にか、朱に交はれば赤くなる、榮華の様が身に染みて、母の歎きを餘所に
見て、「斯かる立派なお屋敷へ、彼様な賤しい母親を出入りをさせては、御
當家の穢れ、何んとかして出入りをさせぬやう、善助さんより宜しくお取
計らひを願ひたい」と申出でました、イヤハヤ言語道斷な娘、何故に此の
娘が斯やうな事を申出でましたのか、是れだから矢張り血肉を分けた親子
でなければ、兎角物事が水臭くなります、此の兩人の娘と云ふものは、其
の實源次郎夫婦の中には、女子も男子もなき故に、夫婦の者が眞心籠めて、
淺草の觀世音様へ祈願を籠め、「何うぞ子供を一人お授け下さるやうに」と、

熱心に祈つて居りました、ところが或る日の事に、雷門前を出て歸らうと
 仕ました折りしも、兩人の女の子の懐中に書附を入れて、棄て子がしてあ
 った、書附を取り上げて見ると、「事故あつて棄て子するものなり、心ある
 人は拾ひ上げてお育て下さるやう」と書いてありましたから、天の與へど
 伴れて歸り、夫婦の者は我が子と致し、蝶よ花よと育て上げ、讀書、絲竹、
 縫針と女子の業は何呉れとなく、辛い手許ながら教へ込み、可愛い／＼と
 育てたのでございます、して見れば、生みの親より育ての親、尙更大切に
 せねばならぬのに、其の大便を打忘れ、母に與へる五兩の金子は己等が取
 つて、櫛笄、粧ひ化粧の足しにして、母へは送らず、林を頼んで遂には出
 入りまで止めて呉れいと云ふ、實に顔附にも似合はぬ人でなしの姉妹、併
 し世の中には此様な奴と云ふものは稀れでございます。
 左様な事とは夢にも知らず、今日しも母親のお豊は、可愛い我が子に對面
 して、五兩のお金子を頂いて、久し振りで積る話をもして來ようと、タヨ
 ー來たのは駿河臺、河勝丹波守屋敷の門前、

お豊「チヨツとお願ひ申上げます」

門番「何者ぢや」

お豊「お百、お縫の母親でござります、何卒お通しを願ひます」

門番「成らぬ、今日は其方のやうな穢い者を、當屋敷へ入れる事は相成ら
 ぬ、大切なるお大名様のお成り、お目觸りになる、ア、今日は成らぬ、
 歸れ」

お豊「けれども毎月参りまする定日でござります」

門番「縦ひ定めの日でも相成らぬ」

お豊「夫れでは恐れ入りますが、チヨツと娘を此處まで……」

門番「黙れッ、假にも殿様の御寵愛のお百さまお縫さまの兩人を、此處ま
 で呼んで呉れいとは無禮であらう、控へて居れッ」

お豊「ハイ、アノ私の娘は、殿様のお妾奉公に上げたものではござりません、
 唯奥付きのお小間使ひとして参りましたもの」

門番「エ、左様な事を門前で聞きたくはない、下れと申すに」

お豊「ではござりませうが……」
門番「成らぬ、アノ茲な不埒者奴ッ」

お豊「アレ——ッ」

と云ふのを、襟首取つてズル／＼ズル、何んの用捨も荒男、ズド——んと突き倒されてお豊は、バツタリ其處へ倒れましたが、漸う起き上り、

お豊「モシ、夫りやア餘りでござります、何うぞ娘に唯一目」

と、頼み入るのを聞き入れず、道の半丁も引き摺つて來まして、六尺棒を以て、お豊の腰骨を一つビユ——ッと打ち据ゑた、散亂髪になつてお豊は

お豊「アレ——ッ」

と云ふ間ほごなく、天下大目付の勢ひで、家來共まで大威張り、往來をして居る中には、心ある人がありましても、河勝の勢ひに怖れて、喙を容れる者はない、仕方がないので、お豊は、

力なく、起ち上り、
亂る、頭髮も其儘で、

杖に絶つてヨロ／＼と、
夢かごばがり呆れ果て、



何んと言葉も獻萩り、
河勝屋敷を後に見て、
歸り來つた折りも折り、
鮮魚盤臺天秤棒、
向ふ願卷を締め込んで、
紺の前掛け松葉の散らし、
鮪に御用はござらぬかと、
是れぞ天下に名も高き、
然も大久保彦左衛門の、
町人百姓にや肴は賣らぬ、
或は旗下八萬騎、
人に斯うよと頼まれりや、
相手構はず飛び込んで、
身は町人でありながら、

☆ 俠骨一心太助

色蒼冷めて悄然と、
飯田町なる堀止へ、
遙か向ふの方よりも、
芥子玉絞りの手拭ひで、
眞鍮矢立を腰に差し、
比目魚に麥魚方頭魚、
廻り來ました一人の肴屋、
駿河臺なる錦の小路、
隠目付を咐吩かり、
二百六十餘大名、
出入り御免の肴屋で、
縦ひ火の中水の底、
弱きを助け強きを挫く、
武士も及ばぬ魂にて、



※ 俠骨一心太助
 眞の俠客一心太助、
 此の落着は如何になるか、

(其の三)

粹な深川勇みの神田、
 勇み肌なる神田子、
 江戸は八百八丁町、
 立つ子這ふ子に至るまで、
 三河生れの一心太助、
 通り掛ければ中根の女房、
 歸り來つた折りも折りの。
 江戸は二百六十餘大名の膝下、部屋者、
 大勢往來をする中に、
 尾張市ヶ谷お屋敷の、

此場へさして乗込んだ、
 チョツと一息次ぎの段。

人の圓きは飯田町、
 天下御免の肴屋で、
 裏家小家にかけまして、
 男一匹と知られたる、
 今日しも盤臺肩にして、
 河勝屋敷を後にして、
 折助共の数は知れず、
 紺の看板丸八印、
 折助共が七八人、



一杯機嫌の千鳥足、
 漂々と差し掛かる。

一步は高くまた低く、

此方はお豊、唯物忘れをした風情で、
 ふと同時に、酔拂つて居る折助は、
 ヨロ／＼としてお豊の身躰にドンと當
 りを附けた、

お豊「アレツ、御免下され」

と詫びをして、横へ寄らうとすると、

折助「氣を附けやアがれ、此の懦婦奴」

と、平手でお豊の横面を一つビシヤツ、

お豊「アレエ——ッ……」

折助「彼れも是れもあるかね、氣を附けやアがれ」

とまた一つ打たれた、お豊は、

お豊「何うぞ御免下さりませ」

折助「ナニ、畜生、此様なのを喫やアがれ」

※ 俠骨一心太助

と、打つやら擲るやら蹴り倒すやら、お豊はキャア〜泣いて居る、往來の人々は此の躰を見て、

「ア、氣の毒だ、丸八印の半纏は、取りも直さず市ヶ谷の尾張様の部屋者だ、此様な者に相手になつた日にやア、夫れこそ我々の一命に拘はる大事、とは云ふもの、可哀さうだアレヨ〜」

と見て居りますけれども、誰も助けて遣る者はない、ところへさして通り掛かつた、肴屋太助、

太助「オイ〜、何んだ〜、大勢が寄つて居るのは、何んだね」

○「オヤ、三河町の親分ですかね、今斯う〜斯う云ふ譯で、彼の女は泥酔漢の爲に、酷い目に遭つて居るのです」

太助「宜し、其奴は棄て措く事は出来ねね、ソレ行けッ」

と云ふより早く、鮮魚の盤臺を夫れに置いて、天秤棒を小脇に抱へて、人押し分けて、其の中へツカ〜と飛び込んで来た、

太助「ヤイ、丸八印を笠に被て、江戸の市街の中央で、罪ない者を咎め立

てを仕やアがる、如何に酒の機嫌とは言ひながら、此ん畜生、乃公の腕前を喫つて成佛しろね」

と、天秤棒を振り上げて、突然折助共の背骨の碎けるほど、擲り附けました、すると中間の一人、

◎「ム、ン、痛ね」

太助「痛ねやうに打擲るのだ、心の好いやうに擲る奴があるか」

△「オヤ、此ん畜生、人を馬鹿に仕やアがる、其處動くな」

と、眞鍮作りの木刀を引抜き、四方八方から、太助を目掛けてボカ〜打つて掛かつて来る奴を、

太助「エ、何を吐かしやアがる、コリヤ、當前の肴屋と思つて居やアがるか、此ん畜生、神田三河町の一心太助とは乃公の事だッ、サア我れと思

はん者は皆出て来い、片端から脊髓骨を打ち折つて遣るのだ」

と、其の勇ましい言葉に、折助共は互に顔を見合せて、

大變だ、此様な奴の相手となつちやア後が五月蠅い、何しろ此奴の後見と云ふのは喧ましいのだ、我儘御免の大久保彦左衛門てね、禿頭が附いて居るのなもの、乃公達は虫螻蛄同様に思つて居る、品に依つては、徳川の將軍様さへ頭を押へると云ふ老爺だ、堪らねへ、此奴は甚い奴が出て来やアがつた』

と、皆僻易して居るとしるへ、側に見物をして居る江戸子連中、

『親分の助太刀をするから、サア来い、折助共、其處動くな、弱い者苛め、酒を飲つて、甚い目に遭はしやアがる、敵討だ、親方、お助太刀を仕ます』

と、彼方から割木を持つて来るやら、此方からは天秤棒を持つて来るやら、大勢掛かつて嘔鳴つて居る、如何なる中間も堪らないから、

◎「ソレ、早く逃げろ」

と云ふので、ドシ／＼逸足出して逃げ出だす、

太助「待て／＼、此の野郎、待てと言ふに」

と云つてる間に、到頭皆々行つて了つた、中に一人逃げ後れて、困つて居る奴がある、

太助「野郎、待てッ」

中間「痛ね／＼」

太助「痛ねも何もあるか、ヤイ、此方へ来い」

中間「何うか親分、助けて呉んねい」

太助「オ、手前だな、此の女の横面を打擲つた奴は」

中間「ナニ、私ちやアございません、彼の先に逃げた奴です」

太助「イヤ、手前だ、オイ、女、何うした」

お豊「ハイ、有難うございます」

太助「身躰に怪我はねねのか」

お豊「少し腰の邊りが……」

太助「ナニ、腰の關節が外れるやうな心地がする、其奴は大變だ……ヤイ、腰の關節が外れたと言つてるぞ」

中間「ムウ、ヘイツ……」

太助「何うだわ、別に紛失物はねわかわ」

お豊「ハイ、有難うござります、別段紛失物はござりませんが、懐中の財布が……」

太助「何んだ、財布がなくなつて了つた、ナニ、幾らばかり金子が這入つて居た……」

お豊「アノ、十文ばかり……」

太助「ナニ、一貫文だ、宜し、斯う一貫文以上銭が這入つて居たさうだ、サア出せ、出しやアがれ、出しやア赦して遣るが、出さなかつたら、其分では捨て置かねぞ」

言はれて仕様がねわから、腹掛の衣囊から少々銭を出し、

中間「何うぞ是れで勘辨してお呉んなさい」

と差出だす。

太助「ム、ウ、謝るなら堪忍して遣る、是れから後は氣を付けやアがれ、

此ん畜生」

此の太助の權幕に中間は驚いて、其場を逃げ出さうとするのを、

太助「エ、此の馬鹿野郎奴」

と、向ふへ突き飛ばした、及腰になつて、タタタタツと中間は走り出したところを、足で蹴たから堪らない、俯向にバタツと倒れた拍子に、大道で鼻柱を摺り剥ぐ、血汐を流しながら夫れなり逃げ出して行つて了つた、後に残つた一心太助、

太助「オイ、女、お前は何處の人だわ」

お豊「ハイ、飯田町の堀止に居ります者で」

太助「ム、ウ、成程、ム、ウ……八百屋久兵衛の世話で、ハ、ア、何が商賣だ……何も別に商賣はねわ、ム、ウ、お前の亭主と云ふのは誰だわ……何んだ、天下の足輕で、中根源次郎、ム、ン、其の源次郎と云ふ人は、何う仕たのだ……ナニ、元和の戦ひで、戰場へ出た限り姿が見えない、ム、ウ、將軍様のお怒りを受けて浪人をした、娘を河勝丹波守様へ奉公

に上げた、ナニ、會ひに行つても會はして呉れない、門前で打叩かれた、甚い奴だな、畜生、宜し、聞かぬ以前なら兎も角、聞いたからにやア棄て、は措けない、乃公の力ちやア行けないが、駿河臺に大久保彦左衛門と云ふ、乃公の親分があるのだ、心配するには及ばねわ、乃公が宜いやうにしてお前の敵討をして遣るから、サア來ねわ」

お豊「何うも有難うござります」と、

地獄で佛に會うたる心地、

一心太助に伴れられて、

肴屋宅となりぬれば、

太助「ア、嬢ア、今歸つて來た」

女房「是れはお歸りあそばしませ」

と、出迎ひしたのは、女房のお政、

お政「定めてお疲れでござりませう」

と、手を突いて挨拶をするから、

其の嬉しさは如何ばかり、
歸り來たのは三河町、
太助は聲を張り上げて。



太助「ア、手前は夫れだから困るのだ、何うもお屋敷方から嬢アを貰ふと、是れだから困る、何時歸つて來ても、お歸りあそばせと、鈍垂れた事を居やアがる、オ、宿の、歸つたかねと、斯う言へ、オイお豊さん、是りやア乃公の嬢アだ、だかね、肴屋の嬢アにしては些と不相應だ、武家の娘てわものは、鈍垂れて居て困る、乃公も去年までは一人の阿母があつたのだ、病氣の爲に亡くなつて了つた、夫れで命日忌日には阿母さんの事を思ひ出して、拜んで居るやうな譯だが、家の内が不自由だと云ふので、大久保の老爺さんが嬢アを貰はなくつちやア可けないと云ふので、遂にお屋敷の娘が、乃公の處へ嫁入つて來やアがつた、何時も下らない事ばかり吐かしやアがる、是れから乃公はお前を阿母と思つて世話をし、て上げるから、心配しねわで居なさい、オイお政、阿母だと思つて大切に仕ろわ」

お政「是れはお越しあそばせ……オヤ、お前さんは、お豊さんちやアないか」

お豊「アラ、マア、お嬢さままでござりまするか、變つた處でお目に懸かります」

お政「お豊どの、誠に耻かしい次第で」

お豊「お嬢さま、何ゆる貴方斯やうな處へお嫁入りをなさいました」

太助は横の方で妙な顔をして「何ゆる斯やうな處とは人を馬鹿にして居やアがるが、何うやら知つて居る中と見わる」と思ひながら、横で聞いて居りますると、女房お政は、

お政「お耻かしながら、父の許しを受けまして、斯やうな満らない肴屋なれど、縁あつて嫁附きました、皆是れ前生の因縁事でござりませう」

お豊「夫れは誠にお目出度うござりまする、が豊夫町家へお嫁附きあそばすとは思ひませなんだものを」

と話をして居るのを聞いて、太助は、

太助「オイ、人を馬鹿にするな、だから公乃ア嫌だと云ふものを、なア、先達て大久保の老爺さんの屋敷で、南京の古渡りの皿を十枚、夫れは將

軍様から預かつた大切な皿だと云ふ、六月の中旬土用干しを仰せ付けられた際に、十枚の皿を一枚でも打ち破つた者があれば、其者の一命を奪ると云ふほど、大切な品、夫れを此のお政が手傳ひに行て居つて、其の皿を一枚打ち破つて了つた、夫れが爲に一命がないと云つて心配をして居たから、乃公は聞いて可哀さうだと思ひ、残つた九枚の皿を石の上に打ち付けて、皆打ち破つて了つた、夫れが爲に大久保の老爺は乃公を引張り出しやアがつて、將軍様へ申譯の爲に手討にする、斯う云やアがつた、何の爲に手討にするのだ、皿を破つたから手討にする、云ふ、けれども皿は金子を出しやア買へるもの、尊い人間の一命を皿の爲に取るなんてね、其様な無法なことつてねものがあるものか、天下の御異見番を勤めるほどの大久保さんが、是れ位ゐの事が捌けなくつちやア、人間の面貌をして世間は歩かれないと云つて遣つた、すると大久保の老爺も成程と氣が附いて、遂に將軍様へ異見をして、乃公の一命を助けた、其時茲に居るお政の女めが、乃公の心が面白いと云つて、宅へ歸つて到頭

乃公に戀病ひと云ふのだ」

お政「アレ、マア、嫌でござりますよ」

と、俯向いて顔を赧くして居ます、

太助「何も別に顔を赧くするには及ばねね、夫れに違ねねのだ、夫れから到頭お前、阿父さんの酒井孫左衛門さんが大久保の老爺さんを頼んで、乃公の嬬アに貰つて呉れろと云ふから、私ちやア此様な者を嬬アに貰つちやア面倒だといつて断つたのを、無理遣りに嬬アにして呉れろと云つて来やアがつた、今となつて満らねね肴屋、前生の因縁とは何んだわ」

お政「是れは誠に耳觸りの事を申上げて恐れ入ります」

太助「イヤ、強ち咎める譯ちやアねねが、マア言は、其様なものだ、併しお豊さん、必ず心配するには及ばねね、サアお政、お豊さんを大切に、何様な者が出て来ても、渡す事はならねねぞ」

お政「畏りました」

太助「品に依りやア相手の方から、渡せと云つて来るかも知れねね、決し

て渡してはならねねぞ」

お政「ハオ、其邊は御心配御無用でござります、若し乗込んで来るやうな事があれば、私も屋敷に居りますうち、教へられましたる薙刀の一手を以て」

太助「何んの斯んのでね、人を馬鹿に仕やアがる、手前が薙刀を振り廻しやア、乃公ア天秤棒で掛かつて遣る、ドレ、是れから彦左衛門の老爺さん處へ行つて来よう、併しながらお豊さん、河勝の容子は何うだね」

お助「夫れは然々斯やうでござります」

と、掻い摘んで話をする、

太助「ム、ウ、して其の林善助てね野郎は」

お豊「以前は私の所夫と同じ足輕でござりまして、丹波守は組頭をして居りました」

太助「ム、ウ、してお前の所夫と云ふのは、死んだのか、生きてるか分らねねのか」

＊ 俠骨一心太助

お豊「御意の通りでござります」

太助「成程、で將軍様の槍は」

お豊「夫れも行方が分らないので、夫れゆる所夫は鎗を持って逐電をしたと云ふので、お咎めを蒙りました」

太助「宜し、其奴は何んでも怪しい事があるに違ひねね、兎も角、河勝の所爲が憎い、一番大久保の老爺さんに相談を仕て来よう」と、

表の方へ飛び出だし、

駈けて来たのは駿河臺、

勝手覺ねた入口で、

聲が一室へ聞わたで、

扇片手に提げ刀、

用人笹尾喜内なり。

喜内「是れは太助ではないか」

太助「イヤッ、喜内さん、御免なさい、老爺はお在宅かね」

義を見て勇む一心太助、

大久保屋敷の御門内、

頼む願ふと大音聲、

黒の羽織に小倉の袴、

ド——レと玄關へ現れたは、

喜内「コレ〜、貴様は言葉が粗いから困る、老爺とは何んだ」

太助「だつて、老爺だから老爺と云ふのです、年齢が寄つたら老爺と云つたつて構はねね」

喜内「夫れが可かぬ」

太助「夫れぢやア禿ちやんか」

喜内「尙悪いぞ、控へろ、何んぞ用事か」

太助「エ、御老人にお目通りをさして頂きたいので」

喜内「初めから然う言へ、困つた奴だ、用事の趣きは何んだ」

太助「夫れは天下の一大事、お前さんぢやア分らねね、御老躰に目通りをして申上げねばならぬ」

喜内「少時待て」

と待たして置いて、笹尾喜内は奥の室へ参り、彦左衛門の前に両手を支へ、

喜内「ハッ、申上げます」

彦左「ア、喜内、改めて何ぞ致した」

＊ 俠骨一心太助

喜内「一心太助が参りましたとござります」

彦左「オ、太助が来たか、何んぞ用か」

喜内「ハイ、天下の一大事と申し居ります」

彦左「ハ、ハ、ハ、箸の倒れたやうな事でも、彼れは天下の一大事だと申す、五月蠅い奴ぢや、予は留守だと申せば宜いに」

喜内「是非執次をして頂きたいと申して居りました」

と言つて折柄、次の室より、

太助「ア、最う出迎ひするには及ばねわ、茲に来て居るのだ」

喜内「イヤツ、恐ろしい腕白な奴、困つたものだ」

と言つてるところへ、襖をガラリと押し開けて、

太助「イヤツ、御老躰、今日は」

彦左「オ、太助ぢやアないか」

太助「へい」

彦左「何んぞ用事か」

太助「エ、他事ぢやアございませませんが、御老体、お前さんは若年の頃から、戦場馬場を往來をして、真田の撥ね鎗、後藤の投げ鎗と云つて、何時も自慢をなさるが、其方では自慢が出来るが、お前様は一つ自慢の出来ない事があります」

彦左「ア、何んで自慢が出来ない」

太助「年齢を取つて在らつしやるから、大きな聲で言はないと聞わぬし、と云つて大きな聲で言つちやア、高塚一重隣りは、大目付河勝丹波守、彼の者に悪事のあると云ふ事は、お前様、豈夫知りますまい、お前さん、幾ら威張つたところが、駄目です、と云ふのは、今日私やア商ひを仕ながら、通り掛かつた飯田町、折柄一人の女を捉へて折助共が打擲つて居る、助けて容子を聞いて見りやア、將軍様の鎗持であつた、中根源次郎と云ふ者の女房お豊、中根は戦場で行方分らず、同じ組内であつた河勝儀右衛門は、今は出世をして隣りの屋敷で、彼様な立派な生活、林善助と云ふ者は其の屋敷に使はれて、御用人と云ふ役を勤めて居るさうだ、

夫れに就てチヨツと尋ねたい事があるのです」

彦左「ム、ウ」

太助「彼れは一体何う云ふ事情で出世をしたのです」

彦左「彼れは大坂方の剛勇海野六郎右衛門の首級を貰つて、其の功に依つて出世を致したのぢや」

太助「成程、林善助と云ふ野郎は何うしたのです」

彦左「彼れは側で見ても居たと云ふので、證據人となつて名乗つて出たのだ、今は河勝の屋敷で用人を勤めて居るのだ」

太助「サア、其處です、夫りやア何方になつても構はないが、現在同じ足輕、中根源次郎の女房を欺し込み、娘兩人を小間使ひに上げさせ、今では其の兩人とも丹波守の愛妾として居るさうで、ところで今日久し振りで、兩人の娘に會ひに行くと、門前拂ひを喫つて、剩へ打つて打つて打つて、大道の中央で以て目の飛び出るやうな甚い目に遭はしやアがつたさうです、不埒な娘をば異見を仕ようより、太目付役の河勝が、大体

怪しからの奴だ、だから私ちやア乗込んで痛め附けて遣らうと思ひます、丹波守の髻に手を掛けて、素首を引抜いて遣らにやア腹が癒ねぬ、夫れにお前様は隣屋敷に居ながら、其様な事も分らねぬのは、生きて居るのか、死んで居るのか、餘り癪に觸るから乃公ア出て來たのです、サア隠居さん、何んとか言つてお呉れ」

彦左「ム、ウ、して其のお豊と云ふのは何うした」

太助「サア餘り可哀さうだから、宅へ伴れて歸つて、さうしてお前さん、其のお豊てわ者は、私が預かつて居るのです」

彦左「宜し、夫れは誠に感心の至り、河勝の容子を調べ、若も怪しい事あらば、此の彦左衛門、天下の爲め屹度處分を致すである、安心いたして立歸れ」

太助「イヤ、夫れでこそ日本一の老人、御免なさい」

と太助は其儘立歸る。

後に残つた大久保は、

茶の羽織には小倉の袴

緒太草履に身を戴せて、腰を曲めてヒヨコ〜と、門を這入れれば玄關先。

藜の杖に籠りつゝ、隣屋敷へ入り来る、

彦左「お頼み申す、頼まうぞや」此の聲に執次の者出て、

執次「ア、何方からでござる」

彦左「ア、何方からでもない、表から来たのぢや」

執次「イヤ、是れは何方かと思ひますれば、お隣り様の御老人」

彦左「ア、何方かと思はないでも、隣りの老人、イヤサ、狸老爺のゲジゲジでな」

執次「ム、ヘエイ……」

彦左「些と河勝殿にお目通りを願ひたい」

執次「少時お待ち下さるやう、直にお執次を仕ります」

彦左「イヤ〜、隣りから隣りへ遊びに来た者、然う叮嚀にされては困る、

別に禮儀か欠くと云ふ譯ではないが、此儘で御免を蒙る」

と、抜目のない彦左衛門、何か悪事の端緒を捜し出したいと思ふに就いて、

執次をも待たず、緒太草履と、藜の杖を玄關の片邊に並べ置き、案内を

さして奥の室に、

這入つて見れば河勝は、

林善助諸共、

お氣に適りをば五六人、

山海田野の珍味を列べ、

之れを眺めた彦左衛門、

「ム、ウ、憎むべき丹波守、何か容子がありさうな、然も徳川大御所家

康公は、千辛萬苦の功を積み、漸くにして治めたまひし天下の政治、僅

かに貫ひ首で立身をしたとて、斯く晝中に淫酒に耽り居るとは、愈々不

埒極まる奴だ」

と、怒り心頭に發しましたが、彦左衛門はさあらの体にて、此の酒宴の席

☆ 俠骨一心太助
 二四八
 を幸ひに、天下の爲め丹波守と善助の襟首を取つて押へ、お百お縫の身七を調べ、目に物見せて呉れんづと、茲に大久保彦左衛門の眼力に依つて、河勝の悪事を看破すと云ふ、世に名高い、大久保三政談の中、一心太助の働き、彦左衛門の松の屋敷の由來と云ふは是れからでございませうが、チヨツと一息。

(八) 富士の夜嵐曾我物語

(其の四)

騒がしき壽永の空の秋風も、
 雲霧晴れて見渡せば、
 山高うして水清く、
 由井の濱邊も浪立たず、
 静けき御代を壽ぎて、
 太しきたちて百しきの、
 源家の勢ひは朝日の昇るの有様、
 頼朝公に從ふ諸大名、
 何れも鎌倉に軒を
 列べ、七谷郷もある中に、
 玉繩御殿の大廣間、
 正面に控へましたる頼朝公、
 左右には數多の諸大名を從へ、
 頼朝「源太景季は何故遅いか、曾我中村へ河津の小童共の捕方を命せしに、

吹き收まりて昨日今日、
 月は隈なく冴に渡り、
 心も澄める相摸灘、
 緑色増す海の面、
 千年経るてふ鶴ヶ岡、
 今ぞ榮ゆる鎌倉の里。

☆ 富士の夜嵐曾我物語

何故歸りが遅いぞ』

頻りに氣を苛つて居られます。

轉る話は源太景季、

曾我中村に使ひして、

哀れ兩人の子供をば、

後に致して鎌倉の、

其夜は兩人の童を、

兩人の状態を見てあれば、

幼けれども宮王も、

守るも最ご健氣なる、

由井ヶ濱邊の荒浪と、

必ず未練の振舞ひすな、

西に向ひて手を合はせ、

致へられたる弟は、

君命背き難ければ、

祐信萬子を宥めつゝ、

繩打ちにして中村を、

己が屋敷へ立歸る、

一室に寝ませせて、

兄は弟を勦れば、

兄の教へを其儘に、

『明日は愈々引き出だされ、

共に消わ行く我が身体、

太刀取り役が来たなれば、

南無阿彌陀佛を稱へよ』と、

聲曇らせて『お兄上様、

西は何方でござりまする、

西に向ひて指をさし、

必らず忘れたまふな』と、

『滅多に忘れは仕ませぬ』と、

『さはさりながら兄様よ、

後に残りし母様が、

また養ひの父様に、

死んで行く身の不孝の罪、

實父の敵の祐經が、

思へば口惜しお兄上様』と、

『オ、有理ぢや悲しや』と、

ワツとは泣けず潜然と、

始終佇聞く梶原は、

斯かる可憐しい幼子を、

尋ぬる聲に一萬は、

『西方淨土は此の邊り、

言はれて弟宮王丸、

言ふ聲さへも濡り勝、

死する我等は厭はねど、

何うして暮したまふらん、

万分の一も報せず、

尙だ夫れのみか現在の、

此世に時めき残るかど、

兄一萬に縋り着く、

兄弟共に抱き合ひ、

泣き明したる未明、

如何に主君の命ちやとて、

ムザ／＼斬つて棄てられう、

生田の森の大木戸で、替へても此の子の命乞ひ、道に背くと景季は、玉繩御殿へ来て見れば、

先駆け仕たる功名に、致し遣らねば武夫の、早々屋敷を後に見て、今や遅しと待ち受ける、

頼朝公は威丈高。怒りの顔色を現はして頼朝公、

頼朝「源太」

景季「ハ、ツ」

頼朝「昨夜にも曾我兄弟を召連れ歸ると思ひの外、何ゆゑ遅刻いたせしや」
景季「ハ、ツ、恐れ入り奉ります、上意を蒙つて曾我中村へ参り、恙なく
兩人を召捕り候へども、母の萬子が生き別れ、義理ある父祐信が恩愛の
情見るに忍びず、夫れゆる遅刻いたし、前夜立歸り、拙者屋敷へ留め置
き、兩人の子供の様を見て、實に哀れと存じましたゆゑ、斯かる幼き者
の首打ち取りましたとて、無益の殺生と存じますれば、何卒兩人の生命

を、此の源太景季にお預け下し置かれまするやう、さる代りには兩人と
も出家得道をさせ、武門の業は致させまじく、依つて兩人を此の源太に
下し置かる、やう、願ひ奉ります」

頼朝「黙れツ景季、其方に得せんと存じ、召捕らせた者にあらず、彼等
を生かして置く時には、伊東の次郎の敵と心得、此の頼朝に恨みの及を
向ける者なり、生かして置く事は罷りならぬ、疾く下つて首を打て」

景季「ハ、ツ」

頼朝「確と申付けたぞ」

景季「ハ、ツ」

諫めて止まらぬ御有様、悄然歸る景季は、然々斯やうと物語る、縦ひ恨みがあればとて、幼き者の首打つて、

救ふ手段もなき儘に、父の平三景時に、聞いて梶原景時は、西も東も辨へず、何功名になるべきや、

源家末代の耻辱なり、
矢筈形なる大紋に、
金銀作りを前半に、
四邊拂うて堂々々々、

諫めて助け取らせんと、
黒風折りの立烏帽子、
手に中啓を携へて、
玉繩御殿に登城する。

頼朝公の前に出で、兩手を支へ、

景時「恐れながら我が君、承はれば曾我の太郎の養子、伊東次郎に恨みありとて、由井ヶ濱に於て打首の處刑、御有理の至りには候へども、祖父次郎には恨みあればこそ、富士の裾野に於て、斬罪に處せられました、併し其の孫共には恨みなき者と存じ候へば、何卒此の平三景時の、石橋山の戦ひに君の御一命の危きを、敵と味方でありながら、お救ひ申した功名に引き替へ、兩人の一命を助けたまはるやう願ひ奉ります」
頼朝「黙れツ、其の功名があればこそ、汝にも大祿を與へ、一城の主と致しある、決して曾我兄弟の一命は助くる事罷りならぬ、控へ居れツ、平三、無禮であらうぞ」

と、烈火の如くに憤つたり、是れには平三、返す言葉もなく、差控へて居ります。

此時頼朝公の左の席に、身には白茶の大紋立烏帽子、丸の中には三引龍の紋染め出だし、銀の中啓を持つて、威儀を正して控へ居ります。今鎌倉の諸士の別當、三浦九十六家の総統領、和田左衛門義盛、聊か席を進み出で、兩の手を支へ、

義盛「恐れながら御前、梶原殿の命乞ひをされる如く、斯かる幼き者を打ちたたまうても、何功名に相成りませう、縦ひ生かして置けばとて、君は日本の總追捕使、相手は吹けば飛ぶやうな童、心措く事は更になし、今彼れの頭を斬る時は、下々の者が君の御威勢に怖る、ばかりにあらす、罪なき童を召捕つて、一命を取つたる天下の主、斯かる無慈悲な頼朝公、如何なる憂目を見るやらんと、下々の者に案じさせましては、即ち禍ひは下からとやら、源家の天下に拘はる大事、何卒我が父三浦大介衣笠山に於いて、初めて君の御味方を申上げたる其の功に引替へ、兩人を助け

たまはるやう、偏に願ひ奉りまする」

頼朝「黙り居らうぞ、左衛門、彼等兩人の首打つて國民が案じ、源家の天下に拘はるとは、片腹痛し、助け置いて彼等成長の後、此の頼朝を恨み及を向けたならば、如何いたすか」

義盛「ハッ」

頼朝「夫れを思へば何處までも、助ける事は相成らぬ、疾く打てッ」

義盛「ハ、ッ」

頼朝「誰かある、首斬り役を申付くる、我れと思はん者あらば、是れへ出で、謹んで勤めよ、早く〜」

と頼朝公、

幾らお止め申しても、

綺羅を飾りし星同様、

袖と袂を引き合うて、

愈々頼朝公は怒りの顔色にて、

止まりたまふ氣色なし、

坐列ぶ諸士も夫々に、

唯呆然と返事なし。

頼朝「是れほど坐列ぶ中に、小冠者の首打つ者はなきか、速に相勤むる者には、改めて五百町の領地を得さすであらう……源太景季」

景季「ハ、ッ」

頼朝「召捕つたは其方である、速に打取つて、兩人の首を獄門に架けよ」

景季「ハ、ッ、恐れながら君命に依つて、召捕る事は召捕りましたが、情

けに向ける及なく、此上は首斬る役は餘人に仰せ付けられたう存じます、

十万の強敵は怖れねども、是れには最ご恐れ入りまする」

と、其儘差俯向いて了ひましたゆゑ、

頼朝「コレ、夫れに控へた平太胤長」

胤長「ハ、ッ」

頼朝「汝に申付くる、速に兩人の首を打取つて参れ」

言はれて、荏柄の平太胤長は、

胤長「ハ、ッ、折角の御意にござりますれど、拙者とても戰場馬場の働きを致し、如何なる強敵も怖ろしき事はござりませぬども、是ればかりは

勤むる事は出来ません、何卒餘人に仰せ付け下し置かれまするやう」
聞いて頼朝公、

頼朝「ハテさて大腰拭けばかりである、是れ式の役が勤まらぬか、ア、残念の至りである、コリヤ、誰か打つ者はないか」

と、満面に朱を蹴いだる如く眞赤になつて御憤り、

頼朝「愈々兩人の首を打つ者はないか、ハテさて口惜しい、残念」

と舌も縛れて、鬢の毛も逆立つばかり、四邊ギロ／＼睨め附けて居りまする。

此時末席に控へて居りました、上總國の住人、匹田の五郎利國と云ふ者、御前に進み出で、

利國「恐れながら我が君、其の役は拙者に仰せ付けられまするやう、願ひ奉ります」

頼朝「ム、ウ、出来した五郎、然らば汝に申付くる、速に打取つて參れ、上總國にて五百町の領地を得さすであらう」

利國「ハ、ツ、忝う存じまする」

と、早々御殿を下り、己が屋敷へ歸り來て、身の廻りを十分に調へ、組下の役人十四五名を従へ、乗り込んで來たのは、梶原平三景時の屋敷、

利國「頼まう、君の御上意、曾我太郎の養ひ子、一萬、宮王の兩人、早々疾く渡し候へ」

と、大音聲に申入れ、ば、之れを聞いたる源太景季、

情けを知らぬ犬武士奴、
僅かな祿に目を掛けて、
罪なき者を討たんとは、
見下げ果てたる振舞と、
心の裡に卑しめども、
君命なれば是非もなく、

奥の一室に留め置きし、
兩人の子供に打對ひ。

景季「如何に兩人、承はれ、我等父子を首めとし、和田の一手や千葉上總、大江仁田の人々が、手を交へ品替へ種々に、命乞ひをして見たが、讒者の舌頭に迷ひたまひし我が君、一向お背に入れなく、不憫な者とは思へども前生よりの因縁と諦め、必ず此の源太の繩取りを恨まず、冥途の旅

をして呉れよ』

と、言はれて一萬宮王は、幼き聲を張り上げて、

一萬『モシ、小父様、昨日よりのお手厚き御待遇は忘れません、唯々最期

のお願いには、生みの母上萬子どの、事、養はれたる曾我の太郎祐信殿

に、宜しく傳へたまはるやう』

宮王『便り少き母さまの身上、宜しくお願ひ申上げます』

死ぬる最期の際までも、

不憫さ胸に彌増して、 親に事ふる真心に、

袖を絞らんばかりなり。 勇士の目にも玉霰、

景季『ム、ウ、如何にも祐信殿への事託、母の身上、確と引請けた、必ず

迷はず成佛致せ』

と、涙隠して源太景季、早々兩人に身支度をさせる、

死出の旅路の晴れ着とて、

母の情けの厚小袖、 盛り短き其の模様、

日蔭をしのぶ顔朝の、

露の命の果敢なさは、

さてまた宮王見てあれば、 眞垣とたのむ影もなし、

紅葉に鹿の染模様、 薄紅梅の小袖には、

散り行く秋の楓葉に、 其の有様の淋しさは、

最悲しき身に泌みて、 濡れてや鹿の獨り啼く、

支度が調ひますれば、早々兩人を引き出だしました、情けを知らぬ匹田の

五郎、功名顔して幼子に、繩打ち掛けて引立てる、

由井ヶ濱邊へ来て見れば、 四方に矢來結び廻し、

首斬る場處は中央に、 二枚列べし敷皮の、

夫れへ同胞引き据ゑて、 首斬る刀の鞘拂ひ、

後方に廻り身構へる、 前に兩人は手を合はせ、

南無阿彌陀佛諸共に、 西に向ひて哀れ氣に、

導きたまへ彌陀如來と、 教へられたる其の儘に、

念する心の可憐らしさ。

轉る話は見物の人々、矢來の外には黒山の如く、

○「オ——イ、何と可哀さうぢやアないか、今引き出された兩人の子は、河津三郎祐泰と云ふ人の遺子、曾我の太郎様の養ひ子、一萬、宮王と云ふ若様ぢやげな、夫れが鎌倉様の御意に適はぬので、此の由井ヶ濱に於て打首にするのぢやさうだ、可哀さうぢやアないか」と、

貴き賤しき押しなべて、
子を持つ親は皆一つ、
矢來の竹に絶り附き、
彼様な可憐しい幼子を、
ムザムザ殺すは何事ぞ、
助ける道はないのかと、

呼ばはる聲のさまじくに。

折りしも見物の後の方より、人押し分けて入り込んで参りましたお方は、餘人にはあらず、曾我の太郎祐信、昨日源太景季に別れてより、鎌倉表へ駈け着けて、和田の左衛門、仁田の四郎、いづれも源家に功ある人々の袖に絶つて、兩人の一命何卒助けたまはるやうと、頼み廻つた夫れゆゑに、各々助命を願へども、毫かもお肯き入れなく、手討と聞いて堪り兼ね、此

場へ駈け着けたのでございます。

祐信「ヤア、匹田の五郎殿、少時お待ち下され、斯く言ふ我れは、曾我の太郎祐信なり、切めて最期の際の別れ、許したまはるやう」

と云ひつゝ、矢來の中へ飛び込んで参りました、匹田の五郎も辭み難く、内々でお許し申す、少しも早く最期の際の別れをめされ」

祐信「有難う存じます」

と側に立寄り、祐信は兩人の者に打對ひ、

「如何に兄弟、恨むなよ、
種々に心を廻らせども、
心残さす成佛せよ、
此の祐信も鬚切つて、
して取らせるぞ兄弟よ」と、
嬉し涙にかき昏れて、
其方等が一命を助けんと、
最早叶はぬ天の命、
其方兩人が打たれたらば、
後世の吊ひ懸に、
言はれて一萬宮王は、
心も消ゆるばかりにて、



先立ちまする不孝の罪、
別れを告げる其のうち、
時刻後れては一大事、
引き分け置いて首斬り刀、
太刀の下も地獄なれ、
アハヤ一萬丸の首は、
一鞭入れて土砂捲き上げ、
飛び込み來ました武夫は、
風折り烏帽子を頂ける、
坂東一の鬼武者と、
秩父の庄司重忠の、
戰場馬場の生残り、
主人重忠の命を受け、
お仕置待つたと飛び込んだ、

何卒赦したまはれど、
匹田の五郎は進み寄り、
卒に祐信殿其處お下りめされよと、
大上段に振り上げた、
ヤツと掛けたる一聲に、
前に落つるかと思ふ一刹那、
仕置待つたと大音聲、
花田色の大紋に、
是れぞ武藏の秩父で十萬町、
稱へられたる畠山、
數多家來のある中に、
榛澤六郎重清が、
曾我兄弟の命乞ひ、
此の落着は何うなりまするか、



チヨツと一息次ぎの段。

(其の五)

彼の源平の戦ひに、
馬を擔いで敵陣へ、
關八州の剛者ど、
修羅の衛の其の中で、
功名手柄は數知れず、
追ひ落したる其後は、
我れも武藏の秩父にて、
今鎌倉に時めける、
和田や梶原北條と、
畠山秩父の次郎重忠殿、
坂東一の黒鹿毛に、

鶴越ねの難所を、
躍り込んだる豪傑は、
敵も味方も驚かし、
飛鳥の如く働きし、
奢る平家を西海へ、
鎌倉殿の世とはなり、
十萬町を頂きて、
大江大膳廣元や、
肩を列べる客大名、
今日しも登城いたさんと、
ヒラリ跨がる鞍の内、

右と左を見てあれば、
稻毛の三郎重成の、
従へまして鎌倉の、
往來の人の聲々に、
罪なき者を召捕つて、
聞くより重忠打驚き、
我れは御殿へ馳せ参じ、
汝は仕置を差止めよと、
稻毛の三郎供に連れ、

榛澤六郎重清に、
お側離れぬ豪傑を、
谷の小路に来て見れば、
哀れは會我の兄弟よ、
由井ヶ濱にて打首と、
仔細は詳しく分らねど、
君に願つて命乞ひ、
榛澤六郎走らせて、
漸く來れる玉繩御殿、

遙か末座に手を支へる重忠を、打眺めた頼朝公、

頼朝「重忠、出仕大儀に存するぞ」

重忠「ハ、ツ、相變せなく御機嫌の躰を拜し、恐悦至極に存し奉ります、
就きましては我が君、只今重忠登城仕らんと、市中まで参りましたと

ころ、伊東入道祐親が孫、一萬宮王の兩人、由井ヶ濱邊にて斬罪に相成
るこの趣き、一圓合點參らす、我が君の天命に依つての事、如何なる仔
細か存じ申さねども、未だ幼年の彼等を討取るは不憫の至りと存じます
れば、何卒彼等兩人を此の重忠に預けたまはるやう、お願ひ申さんどて、
急ぎお目通り仕りました」

頼朝「ア、イヤ、重忠、其の儀に就ては、是れに控へた人々、入り代り
立ち替りの命乞ひと云へども、其の儀は相成らぬ、捨て措いて宜からう
ぞ」

重忠「ハ、ツ、仰せにはござりますれど、何罪あつて彼等兩人をお仕置あ
そばされ候ふや」

頼朝「ム、ウ、如何にも彼れが祖父伊東次郎祐親が、伊豆國伊東の莊を預
かりし頃、此の頼朝未だ兵衛佐の昔し、平治の亂に父義朝は討たれ、我
れは平家の捕虜人と相成り、蛭ヶ子島へ流罪の節、耻かしながら伊東が
娘龍姫に手を掛け、男子出生に及び、千鶴丸と名け寵愛いたし居りしが、

祐親京都より立歸り、大いに憤り、我が子九郎祐清に命じ、平家方に二心なき證にとて、不憚や生れて間もなき和子を、小松川の水なる藁ヶ淵に沈めに掛け、剩へ我れを生捕人に致し、再び京都へ突き出ださんと致せし彼れが振舞、予は漸く一方を切り抜け、彼れに控へたる北條が許へ落ち延びたる事である。思へば憎き伊東の次郎、我が子の敵脱し難く、それゆゑ先づ頃富士の裾野に於て、彼れを細附きと致して討取つたり、されば今河津三郎の悴を生かし置く時には、成長の後は祖父の敵と思ひ、此の頼朝に刃を向ける曲者、二葉にして刈らすんば、斧を用ひるに至るとやら、依つて今の間、に打取る所存である、他の願ひなれば汝の功名に愛で、屹度聞き取らせん、なれども此儀ばかりは相成らぬ、棄て措けよ、重忠よ

と、頼朝公は平日に異つて御憤り。

重忠少時の間頭を垂れ、差俯向いて居りましたが、少時あつて君に對ひ、重忠「仰せ御有理には候へども、西も東も辨へぬ幼少の者を、白晝に由井

ケ濱に於て打取りたまふ其の時は、天下の民の耳目に觸れ、君が威徳を損ふの道理、格別の御情けを以て、助命仰せ付けられたく、此儀只管願ひ奉りまする」

強て願へば頼朝公、愈々怒り現はして。

頼朝「諄い、重忠控へ居らう、罪あればこそ召捕つて打取るもの、邪と言はぬばかりの其の過言、自通り叶はぬ、下り居らう、討たねばならぬ、兄弟ぢや」

と、首を左右に振りたまふ、愈々重忠堪り兼ね、

重忠「ハ、ッ、御有理には候へども、其の昔し漢土の大王、武臣千餘人ある中に、長耳と申す賢人あり、或る日大王召されて仰せられけるに、朕が寶藏には七珍百寶一として欠けたる事なし、然るに近頃聞き及ぶに、齊の國に寶を商ふ者ありとの事、汝參つて疾く求め參れよと、金銀數多與ふれば、長耳は君命畏り、彼の齊の國に至りしが、寶を求めずして、君より與へられし大金を、彼の國の貧民を數多集めて、残らず施して立

歸る、十萬の貧民後での悦びは一方ならず、長耳は歸り大王に目通りいたす、其時大王長耳に對ひ、如何に其方、寶を求め歸りしは、如何なる寶なるやと、お尋ねになる、恐れながら求めんとして搜せども、我が君のお膝下にある寶のみにして、他に求むべき寶は是れなく、漸く一つ我が君の許になき、善根と申す寶、之れを求めて参りました、然らば其の寶を是れへ出だせ、ハ、ツ、折角にはござりますれど、今御覽に入れる事は相成りませぬ、時を経て御覽に入れる事もござりませうと申上げた夫れゆゑに、大王は非常の御腹になるかと思ひしに、貧民を助けて参つたと聞いたゆゑ、さのみお怒りもなく、其儘に棄て措かれた、然るに賢人の計らひは後に至つて功現はる、何時の程にか國亂れ、大王敵勢に取り巻かれ、既に危き其のところ、長耳を首め千餘名の家來に取り巻かれ、齊の國へ逃げ延びたまふ、前年施し置きました貧民の中に、武勇優れし者數多あり、其の者を憑み、城廓を構へて、大王を茲に籠らせ、敵軍を引き受けて二度の戦ひ致したるところ、前に施されたる人々、大



王の爲に一命を鴻毛の輕きに比して働きました、遂に敵軍を揉み潰し、大王は以前の領地をお取り返しに相成つた例もござります、是れ即ち長耳が買ひ置きし善根の徳なり、仁義に敵なしとは此の事に候ふ、今會我の子供二人を助け置く時は、後々にはその御恩を感じ、君に一大事の若しある時は、御用にも相立ち申すべし、何卒御賢慮を廻らされて、君は大王、臣は長耳と思召し、兄弟の一命をお助け下し置かれますやう、偏に願ひ奉りまする』

頼朝「イヤ、理を破る法はあれども、法を破る理は豈夫あるべからず、咎あればこそ仕置に行ふ、罪なき者を此の頼朝が何故に討ち取らうや、能つく承はれ、此の頼朝は平治の亂に、清盛の捕虜人となりし時、池の禪尼、續いて小松内大臣重盛の爲めに我れは助かりしが、其の恩義を知りながら、如何に御國の爲とは云へ、助けられたる平家を倒し、今は源家の世となりし事も、興廢は浮世の常とは云ひながら、此の頼朝を助けて置いた故である、何うちや重忠、助けて置いては爲になるまいが



な』
 と、返すく、の押問答、重忠愈々困じ果て、
 重忠「然らば我が君、今森ヶ淵に沈めに掛けし、千鶴丸の御若君が、此の世に存命あるせばせば、曾我兄弟の一命は助けたまはるや」
 頼朝「ム、ウ、如何にも、若し存命いたし居りなば、彼等兩人は助け得させぬ事もなければ、沈めに掛けし千鶴丸、豈夫存命は致し居るまい」
 重忠「御有理には候へども、沈めに掛けたと見せしは平家へ恐れあるゆゑなり、其の實は此の重忠が預かりてお育て申し、只今は天晴れ御成人あそばされ、御親子の對顔、今日か明日かと待ち受けたまへば、何時かは重忠お目通りを致させ申さんと心得居りました、何卒御對顔許したまふやう」
 頼朝「ム、ウ、夫りや本當の事であるか」
 重忠「何んとして君を詐りませうや、今を去ること十六年前、父の島山重能、京都在番の歸途、東海道三島に宿りを求めし際、夜中表を叩き訪ふ



者の候ふゆる、何者ならんと戸を開き見れば、伊東次郎祐親の子息九郎祐清が、生れて間もなき若君を抱き來り、是れは千鶴丸君と申し、由緒正しき方の落胤、なれども今館にあつて育て置く時は、聊か天下に恐れあり、名所は確乎と語らねども、屹度正しき人の若君である、表向きは小松川の水、轟ヶ淵へ沈めに掛けしとは申せども、生ある者不憫の至り、さりどて我が屋敷に置く事能はず、依つて御身の許へお預け申す、行末永く宜しくお取立て下し置かれるやうと、頼みを受けし若君、義を見てせざれば勇みなし、語らぬものを無理に糺すも武士道にあらず、依つて預かり申せしなり其儘伊東九郎は立歸る、左様な次第で何人の落胤とも存せねども、唯武士道を立てんが爲め、容子も聞かずに預り、乳人を選んでお育て申し、父死去の後今日まで、此の重忠の膝下にて養育いたせし豊若丸様、是れぞ我が君様の若館、千鶴丸君にて候ふ、先刻より君のお物語りにて、確かに分りし和子の素姓、卒に御親子の御對面を許したまへ、若館にも嘘ぞ御悦び候はん、コレ誰かある、屋敷へ歸り、

若君をお伴ひ申し、早く登城を致せよ」と、
 申付くれば稻毛の三郎、
 やがて伴ふ若君は、
 月の桂に花の香を、
 吉野の山の櫻の花、
 纏ふ小袖は綾錦、
 入り来る態の優雅に、
 疑ひもなき右大將、
 似たりや肖たり花あやめ、
 咲いてゆかりの色深き、
 十有餘年の其後に、
 是れ重忠の情なり、
 確と汝に預くること、
 建久四年五月雨の、

早速屋敷へ立歸り、
 年齒は二八や十六夜の、
 添へし姿のあてやかさ、
 龍田の川の楓葉か、
 いとも美々しき御扮装、
 露の滴る面貌は、
 頼朝公とは瓜二割、
 菖蒲に紛ふ燕子花、
 最と懐かしさ御親子が、
 無事に對面出来るのも、
 曾我兄弟の命をば、
 助け給うたそれゆゑに、
 末の八日の闇の夜に、



三國一の名山は、
 兄の十郎弟五郎、
 篠突く雨のその中を、
 共に松明振り照らし、
 十八年の天津風、
 富士の高嶺に降り積る、
 龜鑑と稱へ後の世に、
 朝日と共に輝けり、

富士の御狩の其時に、
 咫尺もわかぬ鳥羽玉の、
 他目を忍ぶ簀と笠、
 敵の陣屋に忍び入り、
 吹き戻したる功績は、
 雪より白き武夫の、
 御國の花と謳はれて、
 朝日と共に輝けり。

第三編には曾我兄弟の苦心談、五郎が箱根山にて敵工藤祐經と對面の條、
 大磯の和田の酒盛、朝比奈の鍔曳及び富士の御狩場へ兄弟の討入、首尾
 好く本懐を達するまでの講演を詳しく申上げることになります。

九 佐野の鉢木

(其の上)

東なる佐野の渡りに降りしきる、
 吾が家に迎へ終夜、
 あつき主の待遇ぶり、
 焚きて主従を煖めし、
 後年鎌倉に召出し、
 恩賞として與へたる、
 謠曲百番ある中の、
 思ふが儘に奈良丸の、
 あしも吉田と思召し、
 偏へに願ひたてまつる。

ゆききに惱む旅僧を、
 明かすに寒き茅屋も、
 日頃秘藏の鉢木を、
 厚き意を愛でられて、
 梅松櫻の三ヶの莊、
 時頼朝臣の物語、
 初手許しなる鉢木を、
 拙き技の浪花節、
 不相變の御愛願を、



さて其頃鎌倉北條五代の執權職時頼公、尤も三代の泰時殿の政治向が良かったので、北條家を維持することを得ましたけれども、全くは五代の時頼公の力でこの北條家は九代まで持つたのだと申します、然るに時頼公は多病のお方でありましたから、十三歳になる時宗と云ふ方に六代の將軍職を譲りまして、鎌倉表に最明寺と云ふ寺院を建立いたし、之れにお入りになり、建長寺の住職道隆禪師の徒弟となり、覺了坊道崇と改められました、最う政治向の事は一切口出しを仕ないで居られました、然る處その時分の名奉所と言はれた、青砥左衛門藤綱と云ふ人がございまして、この青砥の諫言もあり、又自分も政治を改めんと云ふ思召立ちをなされました、が併し一旦世を脱れた御身でありますから、行脚僧の打扮となられ、諸國を歩いて實地檢分をして、地頭代官に不當な政治があつたなら、それを矯め直さうと、家臣二階堂信濃晴盛を供にお伴れ遊ばして、

おなじ思ひの主従が、
 赤き心や墨染の、
 袈裟と衣を身にまどひ、
 面をつ、む檜笠、





佐野の鉢木

水晶の珠数をつまぐりつ、御いたはしの有様も、浮世を忍ぶ旅衣、鎌倉山に引きのこし、ならはぬ旅の假枕、足柄山の春色、梢に波の湖は、富士の高嶺や清見瀉、その三河路を打ち捨て、世のうきことも近江路や、中国九州山陰道、良きも悪きも見分けつ、巡り廻つて主従が、久方振りりに鎌倉へ、

釋迦の御弟子の假姿、御國のために何んのその、思ひ立ちぬる朝霞、行方は何所と白雲の、泊りにつきて日にあゆむ、翠した、る四方の空、箱根の山や二子山、尙は行く先は遠江、美濃尾張さへ厭ひなく、山城大和攝河泉、處處の政治、いつしか歳も早や過ぎて、三とせの秋の末つ方、歸り給うて國々の、



地頭代官呼び出し

是非曲直を取調べ、誠の政道を守りし者は、夫れく恩賞を得させ、又不當なる役人は、一々今後を戒めて、残らず政治の行届くやうに遊ばした、是れが爲めに天下の諸役人の驚きは如何ばかり、今までの悪政も矯め直し、世は穩かに相成つて、下々に至るまで、その良政を悦ばぬ者はござりませぬ、是れに依つて天下は全く泰平に治まりましたが、再び弘長の二年、

又鎌倉を立ち出で、其の歳極月中旬過ぎ、淺間の嶽に立つ煙、吹くや嵐の大井山、今ぞ浮世を離れ坂、くだす筏の板鼻や、積りくす筏の板鼻や、歩行停めて主従が。

佐野の鉢木

彼地此地を駆け巡り、早や差しか、る信濃なる、をちこち人の袖さむく、すつる身になきどもの里、墨の衣のうすひ川、花と降り布く雪の道、四邊淋しき夕まぐれ、

時頼「コレヨ信濃」

信濃「ハハッ」

時頼「信濃上野は雪國とは聞きつれど、是れ程の雪とは思はざりしに、アツ三間先も分らぬ程の吹き降り、ア、何んとも言へぬ眺めぢやのう」

信濃「恐入り奉ります、御館に坐せば、綾や錦を纏はせられ、隙間の風もお厭ひの身が、大君の爲め國の爲め、萬民塗炭の苦しみを救ひ取らせんと、斯る難澁の雪の日に、駒にも召させ玉はずに、御徒歩にて厭はせもなき御有様、勿躰至極もござりませぬ、恐れ入り候へども、微臣信濃が背を少時馬の脊と思召し、卒ざ斯う來たまへ」

後、後に手を横げ、背を寄すれば時頼公、ニッコリと微笑を漏らしたまひ、時頼「ア、イヤ、今に始めぬ汝が赤心、予は過分に存する、決して心に懸け呉る、な、これは誠に好い眺望である、何うちや腰折れでも一首出さうなものぢやのう」

信濃「ハ、ッ恐入ります、いつもなればお相手も申上げまする筈なれど、

君が御容子を見奉りて胸せまり候ふま、よき句も浮かび申さず」

時頼「ア、左様か、無理もなきことどもなり、コレヤ、彼の向ふに見ゆる森は何んと申すぞ」

信濃「ハ、ッ、彼れは吾妻の森かと存じまする」

時頼「ム、ウ然らば彼れが吾妻の森と申すか、コリヤ二階堂、吾妻の森と聞く上からは、いかなる大雪に惱まされるればとて、更に厭ひはせぬ……」

「畏れれども古へを、

日本武の大尊、

幾難を遊ばされ、

凱歌を揚げて信濃路に、

流石に猛き尊さへ、

想ひ出されて後髪、

嗚呼吾妻はやと宣ひし、

大と小とは變れども、

思ひ出で、は惚ばる、

東夷を討たんその爲めに、

逆く賊輩を伐りなびけ、

か、らせ給ひし其の時に、

橘姫の真心を、

ひかる、ばかり懐しく、

其の古事も目の前、

君に捧げし我が命、



※佐野の鉢木

なご厭ふべき臣が身の、
アラ面白の雪の夕暮。

積らば積れ降らば降れ、

時頼「何うちや信濃、其方もよい眺めであらうのう」

信濃「ハ、ッ御勿躰なうござりまする」

時頼「それに就て思ひ出したが、此處は上野の國松井田の里に近き處、音に聞く佐野の渡りと云ふ名所は、確かこの邊りと心得るが、其方存じ居るや如何に」

信濃「ハ、ッ御意にござりまする、アレ〜我が君、彼れが松井田の里、此の手に見えるは安中に候へば、確か彼の邊から少し入りましたる在所が佐野の渡りかと存じまする」

時頼「ム、然らば、幸ひ此の處を通り掛りしことゆゑ、一度見物いたして参らん、案内に及べ」

信濃「ハ、ッ、然らば御供な仕りまする」

さらばとばかり主従が、
覺束なくも雪の中、



尋ぬる人もなき儘に、

心の的を先に立て、

佐野の渡りに急がる、

折から向ふの方よりも、

雪に降られて簀と笠、

馬の絆網を肩にして、

勝手覺ねた田浦道。

馬方「雪がア—ナア—ア、降れエ—ぞオ—もオ—〜オ—オ、エ、

浅間のオ—エ—エエ、—山はア—エ、—よ—ッ……アイ、

アイ……何時もオ—オ、—、絶えずウ—ウウ—にイ、—イ、—、

火を燃やア—すウ—ウ、よオ—ッ……」

ブルル……と吹き出す馬の息。

節面白き馬子唄を、
唄ひながらも鈴の音、

シャアノコ〜、シャアノコと歩み來る。

馬子「ヒヤアコレ親方ア、躓くまいぞ、氣を注けさせい、ソ—レ親方

危いぞ、ハイ、ハイ、ハイ……」

振り向いて此の体を御覽に相成つた時頼公、

※佐野の鉢木

時頼「コリヤ、二階堂、處に依つて風土人情は異なるに相違ないが、面
白いではないか、馬に對つて何か馬子が話をして居る様だ」

二階「御意にござります」

時頼「面白い奴ぢやのう」

と見てお在でなさると、馬子は毫しも頓着仕ないで、再び追分節を唄ひな
がら、近いて参りました、二階堂は馬子に對ひまして、

二階「コリヤ、馬子どのや」

馬子「ハア、コレ坊さま、何んだなア」

二階「ア、お前は是れから何の邊まで行かれるお方だな」

馬子「ハア、乃公は是れから、佐野の渡りと云ふ處まで歸る馬だ」

二階「夫れは幸ひである、何うか乗せて行つて貰ひたいものであるが、何
うだ」

馬子「ヒヤア折角だが、坊さま、お断りだよ」

二階「ホ、ウ、見れば荷物も附けて居らぬ容子、歸り馬と見ねるが何んで

断ると言はつしやるのだ」

馬子「坊さま、お前、解らねね事を言はつしやるな、十六貫の荷物を附け
て、乃公が在所から此の先方の松井田の驛まで来て、駄賃を貰つて是れ
から歸るところでござはす、夫れにお前、馬は口が利けねわからつて、餘
計に坊さまを乗せりやア、馬の背中を苦めるやうなものだ、夫れだから
乃公はハア往路なら駄賃を決めて乗せるだんべいけれども、歸途だから
乗せる事は出来ね夫れゆゑ断るのだ、然う云ふお前さまは解らねね事
を云ふ、見掛けに依らねね、滓坊主、イヤッ駄坊主と見ねるなお前さま
は」

二階「コレ、馬子どの、悪口を言はつしやるな」

馬子「悪口でねあアぞ、當前の事を言ふだ」

二階「併しながら是れにお在であるばすのは、お師匠様である、雪の中で
足を痛められて御難澁である、何うぞお頼み申す、乗せて貰ひたいもの
であるが」

馬子「待たつせわや、然う眞面目になつて言はれると、乃公ハア他の難義は構はねねで、自分の言ふ事はかり云つて居るのも、道に違ふから、乃公の了簡にも行かねねで、一つ親方に聞いて見べい……ヤア、コレ、親方、お前さまもコレ、何かの前の世の因縁であつて、畜生と生れて来て苦んで在らつしやるのだが、彼の坊さまを乗せて遣らつしやつたら、佛様の功德を以て、今度の世にア人間界へ出て、結構な身分になれるか知れねねから、苦かんべわけれども、諦めて乗せて遣らさつしやつたら、何うでがす」

「ヒ、イ——ン」

馬子「ハ、ア、イヤ親方、得心して返事をして居さつしやる」
 面白い馬子だと、呆れて時頼公見て在らつしやいますと、

馬子「サア、坊さま、親方が承知をしたから乗らつせい、是れかち佐野の渡りと云ふと、五十町里程で、一里あるのだ、サア乗せて上げるから乗らつしやい」

さらばとばかり時頼公、
 ヒラリ跨る其の様は、
 手綱取る手のいと軽く、
 流儀は確か大坪本流、
 サツと吹き来る山風に、
 花ふりかゝるばかりにて、
 馬子が牽き出す雪の中、
 打ちも揃うて三人伴れ、
 馬の鬣ムンツと掴み、
 流石武門の名將とて、
 つゝもとすれど顯るゝ、
 刻み出だした四の足、
 法衣の袖にヒラ／＼と、
 嘶く駒の勇ましく、
 背後に従ふ二階堂、
 歩みかゝれば馬方は。

馬子「コレ坊さま、お前さまは愈々萍坊主駄坊主だな」
 時頼「ハ、ア、また悪口を言はつしやる、何んで此方が萍坊主、駄坊主だ」
 馬子「サア、能く考へて見さつしやい、釋迦如來は檀特山で難行苦行を重ねて、修行をなされたのである、此の難行苦行と云ふのは、坊さまの當前ちやアないか、して見ればお前さまは平日馬などに乗つて歩けばきものではねねのだ、三界無庵樹下石上と云つて、草鞋を穿いて歩くのが當

前ぢやアないか、夫れにお前さまは馬に平日乗り附けて居るから上手なんだ、殺生戒と云つたつて、生ある者を殺さぬばかりが、お前五戒ぢやアなかんべね、氣附けさつしやい」

時頼「ア、馬子どの、お前は中々感心だ、心掛けの宜い人だな」

馬子「コレ、坊さま、何を言はつしやる、然う言はれると乃公は理窟を言ひたくなるのだ、感心と云ふ事は五分と五分との人間が、己れの知らぬ事を先方から教へて呉れるから、感心と斯う言はれるのだ、乃公は満らねね馬子だけれども、お前さま見たやうな物の解らねね坊さまと、五分と五分に思はれるのは、乃公ハア残念だ、恐れ入つたと何故言はつしやらぬのだ」

時頼「イヤ、これは馬子どの、重ねの粗忽、何うぞお教し下されよ」

馬子「アレエ、何んで坊さま、其様なに叮嚀に言はつしやる、其様なに言はれると、乃公の方も面目ねねけれども、乃公ハア、思つた通り言はなけりやア、氣の濟まない人間だからな、マア勘辨さつしやい」

此時片邊に附いて居りました二階堂は、

二階「コレ、馬子どの」

馬子「何んだな」

二階「物には決りがないと行かぬが、賃錢を定めて置かうかな」

馬子「アハ、ハ、ハ、イヤ、矢張り洋坊主の本性を現しやアがつた、お前さんの了簡では、賃錢を決めて置かうと云ふのは、黙つて乗つて佐野の渡りまで行くと、百文の賃錢を二百文も呉れると云ふと思つて、お前さまは聞くのであらう、物に疑り根性のあるやうちやア、本當の坊さまぢやアねねよ、コレ、マア當前なら百文ばかり貰ふのだけれども、此の大雪の祝ひに、乃公ハア、三十文で乗せて行かう」

時頼「ム、ウ、大雪の中だから、百文のものを二百文呉れいと云ふのは、當前の人情、夫れに大雪の中だから三十文とは安過ぎるではないか」

馬子「サア、三十文貰やア結構だ親方に食はせる麥代だけありやア澤山だから、夫れで乃公に乘せて行かうと云ふのだ、夫れでお前さま解らねね

と云ふから、乃公ハア、餘計な口だと言つて聞かせるが、雪は豊年の貢
と云ふ事がある、冬になるとな、一陽來復の春の陽氣がな、此地の内に
籠るのだ、夫れが寒氣に押へられて、下の春の陽氣が發する事が出来な
い、そこで中へ滯つて虫が生くのだ、生いた虫が麥の根を食ふのだ、そ
こで雪が降ると、其の虫が皆死んで了ふのだ、死んだ虫は麥の肥になる、
夫れで大雪が降ると云ふと豊年だと、百姓は昔から言ふのだ、解つたか、
坊さま」

時頼「イヤ、是れは何うも恐れ入る、中々馬子どの、お前は物知りだ」

馬子「ナニ、乃公に巧者でも何んでもねわでがす、乃公の村に佐野源左衛
門様と云ふ、鎌倉の御浪人があるでがす、其のお方はお前さま、學者で
もつて、乃公の村へ来てからは、村の者を集めて、お天子様と云ふのは、
斯う云ふ尊いお方である、で鎌倉の執權職は斯う云ふ役柄の者だ、神様
は斯うだ、何は斯うだと、一切の事を教へて下さる、夫れで乃公もハア、
毎夜々々その源左衛門様に教へて貰つたから、お前等に對つて夫れだけ

の事が言はれるがな、乃公ね、何も知らねわのだが、ム、……、斯うさ
つしやい、是れからな、佐野の渡りへ行つたら今夜一夜頼んで泊めて貰
はさつしやい、随分一夜話を聞いても、お前等の後學になるだんべわか
ら、然うさつしやい」

時頼「イヤ、夫れでは馬子どの忝い、然らばお頼み申して泊めてお貰ひ申
す事に致さう」

馬子「マア然うさつしやい」

時頼「併し馬子どのや、愚僧は相摸の鎌倉の者だが、相摸の國では馬と申
すが、此の上州では馬を親方と申すかな、方言俚言と云ふ事はあるけれ
ども、何うも合點が參らぬ」

馬子「コレ、坊さま、お前さま解らねわ事をまた聞かつしやる、ナニ、別
に難かしい事はねわのだ、相摸だからつて、上州だからつてね、馬は馬
だ、けれども、此の馬は三貫五百文で乃公に買ったのだ、此の馬のお蔭
で、乃公と妻女と子供と三人が飯を食つて居るのだ、夫れだに依つて畜

生ながら恩があるで、乃公は親方と云ふのだ、親方とは親に方べると讀むだんべね、下から讀めば、方に親なりとも讀むだんべね、夫れだから乃公ハア、親方と云ふだ、なア解らね坊さままだなア、併し坊さま、お前相摸國の鎌倉と言はしやつたな」

時頼「左様でござる」

馬子「夫れちやアお前に尋ねるがねね、北條時頼様は名將だと此邊の者は言ふだ、夫れでお前に其の話の佐野源左衛門と云ふ方がある、是りやア鎌倉北條の御浪人様で、中々忠義天晴れのお武家だ、讒言に依つて浪人して在らつしやる、彼れだけのお方を浪人をさして、其儘にして置くやうな時頼様だと、餘り名將でもなかんべねと思ふが、何うだな、坊さま」

馬子「馬上で聞いたる時頼公、心を鎮め聲和らげ。」

時頼「コリヤ、馬子や」

馬子「ハイ」

時頼「時頼は何か愚將だと此邊の者は申すか」

馬子「コレ、坊さま、氣を附けさつしやい、夫はハア、お天子様の御名代で、日本中の政治の司をなさるところの、北條時頼様、時頼なんて呼ば棄てにすると云ふ事がある者か、お前さま位ゐの坊さまなら、何故時頼様と言はつしやらぬ、氣を附けさつしやい」

言はれて理の當然ですから、時頼公、ウンと行き詰つた、實は乃公がその時頼だとも、言ふ譯には参りませんから、

時頼「イヤ、此れは馬子どの、恐れ入つた」

馬子「ソレ、見さつしやい、一言々々乃公の言ふ事は、何うもハア、お前の氣に適らないやうだ、マア今夜その源左衛門様の處で泊めて貰つて、何や彼や聞かつしやい、後學になるから」

時頼「然らば左様致さう」

馬子「ハイ、ハイ、ハイ」

話しに時のうつるのも、

知らずくりに雪道を、

漸く来たは音にきく、
 馬子「コレ、坊さま、早いものだ、迂乎々々来たは最う是れ佐野の渡りの是れが入口だ、最う是れからな、最つと乗せて行つて上げたいけれども、乃公の宅は此方だから、斯う左へ行くのだ、お前等の行く佐野源左衛門様の方へは彼方へ行くのだ、道が違ふから是れでハア、下りて貰ひたい」

心得たりと駒止めて、

佐野の渡りの雪の夕ぐれ、

三輪が崎なる佐野の渡り、

佐野の渡りと聞くからは、

馬子どの御苦勞に存すると、

二階堂に賃錢を乞胸せ致しますると、

幾らかの錢を紙に包み、

二階「馬子どの、是れは些少であるが約束の賃錢、是れで酒の一杯も上げ

袖うち拂ふかげもなし、

詠みにし古歌は大和路の、

此處は上野東路の、

いかでかこの儘過さんや、

ヒラリ駒より下り給ふ。

晴盛は懐中にある財布を取出して、

二階「馬子どの、是れは些少であるが約束の賃錢、是れで酒の一杯も上げ

たいのだが、土地の勝手の分らぬ我々の事、何うぞ一盞飲んで下さい」
 馬子は其の錢を受けまして、

馬子「ヤア、コレ坊さま、お前、錢を貰つたから世辭を言ふんぢやねわが、考へて見ると云ふと、是れハア、誠に小耻つかしい譯だ」

二階「ハ、ア、何故である」

馬子「イヤア、先程から乃公ね、お師匠様の佐野源左衛門様に教はつた事を、ベラ〜お前等に對つて饒舌つて居たけれどもな、僅な錢でも紙に包んで出さつしやるどころを見ると、乃公ね濟まねわ、當前のお前旅人ぢやアなかんべわ、コレ馬子、息繼ぎだ、是れで酒の一杯も飲め、酒手だと云ふところを、紙に包んで出さつしやるどころを見ると、物事を辨へた坊さまだ、乃公達は取るに足らないから、何事も黙つて在らつしやつたかと思ふと、誠に小耻かしい、何うぞマア許さつしやい」
 時頼「イヤ、馬子どの、然う叮嚀に言はれると、此方も却つて氣の毒に存する、然らば是れより佐野源左衛門方へ罷り越すであらう」



佐野の鉢木

二九六

馬子「マア然うさつしやい、此の右手の方へ行かれると土橋がある、少し行くど辰己の方に松が五本あるのだ、夫れを五本松と云ふ夫れから西の方へ取つて行かれると、丑寅の方から北の方へ行く道がある」

全然磁石のやうに申して居りますから、時頼公はお笑ひになりながら、

時頼「忝うござる、然らば御案内の通りに参るでござる」

馬子「夫れぢやア、乃公ハア、此の親方を納つてな、また後から行くかも

知れない、マア先に行つて頼まつしやい」

時頼「忝うござる」と

馬子に別れて時頼公、

覺束なげに辿りつ、

雪に軒端が傾きて、

壁もあらはに骨が見え、

側に立寄る主従が、

佐野の常世が鉢木と、

教へられたる細道を、

早や来て見れば賤が家の、

觸れば落つる板びさし、

戸外に吊りし筵戸の、

歩み止めて宿を乞ふ、

世に名も高き物語、



後席に詳しく讀上げる。

(其中)

水清ければ魚棲まず、

例に漏れず鎌倉の、

弓矢の譽れ名も高き、

佐野源左衛門常世が、

盡し、甲斐も情なや、

真如の月の影かくす、

譏者の爲めに惱められ、

巡り廻つて上野の、

いぶせき小屋の住居、

妻白砂も諸共に、

果無き業の糸つむぎ、

佐野の鉢木

人潔白なれば世と隔たる、

管領附の武士に、

誠忠無二と呼ばれし、

常に忠義を一ト筋に、

仇に寄せ来るむら雲に、

世の成行ぞ是非もなき、

身は浪人の流離に、

佐野の渡りに足を停め、

糊口を凌ぐその爲に、

浮世はめぐる小車の、

細き命を繋ぎつ、

二九五

春夏秋冬も早や過ぎて、七日前から降りしきる、人は鶴壁を着て立て徘徊すと云へり、もと見し雪にかはらねど、立つて徘徊すべし、細布衣身に合はぬ、ア、世の中の見人毎の心には、なれど我には面白からぬ雪の日かなど、生計の業の駄賃取り、程遠からぬ安中へ、夕を告ぐる鐘の音に、待ち詫びつ、も夕餐の仕度、行脚の僧の二人連れ。

今日しも極月中旬過ぎ、それ雪は鷺毛に似て飛んで散乱し、されば今降る雪も、我は鶴壁を着て、袂もくちて袖せばき、今日の寒さを如何にせん、いかに面白う候ふらん、浮世の中をかこちつ、瘠せたる馬に荷を載せて、行かれし後に白妙は、所夫の歸りの遅さよと、折から戸外にさしかゝる、

歩みを停めた最明寺時頼主従、

時頼「二階堂、彼方で承つた佐野の浪宅は茲であらうな」

二階「御意にござりまする」

時頼「尋ねて見やれ」

二階「ハ、ツ……お尋ね申す、お尋ね申す」

訪ふ聲に、「ハイ」と内から應答を致し、立出でました一人の女、年頃は四十餘り、身には襦袢を纏へども、昔しにかはらぬ心の錦、何んぞなく氣高き容子、さては是れが佐野源左衛門の妻であるか」と思ふに就け、叮嚀に小腰を曲めて二階堂、

二階「ア、卒爾ながらお尋ね申します、佐野源左衛門殿の御浪宅は此方ではござるかな」

女「ハイ、源左衛門の宅は是れでござります、何方からお出であそばし

ましてござります」
二階「イヤ、我々は諸國行脚の旅僧でござるが、御覽の通り此の大雪、誠に難澁いたす、一夜の宿の御無心を願ひたく、御聞き届け下し置かれま

するやう、主人に宜しくお執次ぎを願ひたうござる」

女「是れは、嘸御難澁でござりませう、折悪く所夫源左衛門は他行

いたして居ります、御難澁とあらばお泊め申し度くは存じまするが、

御出家たりとも男子兩人、女の身で主人の留守、お泊め申すのは如何、

お氣の毒ながらお断りを申上げまする」

二階「是れは御有理なる事で、お留守でござるかな」

女「左様でござります」

二階「夫れは據どころござらぬ、ア、残念な事である」

女「嘸雪中御難澁で在らせられませう、是れから十八丁向には、山本と

申す里がござります、日の暮れざるうちに早く夫れへお出であそばし、

お泊りなさるが宜しうござりませう」

二階「是れは、忝うござる、左様なら然う仕りませう」

女は宅へ這入る、門に佇つたる時頼公、

時頼「二階堂、残念な事ぢやなア」

二階「折悪しくも源左衛門留守にござります、女が教へて呉れました通り、

山本ごか申す里へ参り、明日御立戻りに相成りまして、源左衛門をお尋

ねあらせられては如何にござりまする」

時頼「ム、ウ、然らば左様いたさう、主人の不在中に強してたのむも何ん

とやら、明日あらためて参らん」

流石將軍時頼公、却て女の心中をお賞めになりました、去りながら勝手覺

ねぬ片田舎、

互に心はげまして、

降り積む雪の道わかす、

頼む木蔭に立寄りて、

少時防が術もなく、

時に急ぐ鳥の音も、

暫し佇み居たりける。

二階堂は風上に立ち上り、主君の躰に風を當てぬやうに、笠で圍へど心な

歩まうとすれど如何にせん、

うきこと多き旅の空、

肌を破る太刀風を、

薄くなりぬる山本の、

いと哀れの身に泌みて、

き、劈くやうな劔風が、枝に衝つてビュ——ツと吹き寄せる、流石の時頼
公もブル／＼と慄へ給ふ、お側に従ふ晴盛も、己れの寒さは打忘れ、主君
の御容子を見奉つり、思はず知らず泪をハラ／＼と零し、

世が世であれば鎌倉の、

高き臺や玉の御簾、

すき間の風も厭はせらるゝ、

いかに御國の爲ちやとて、

悲歎の涙に咽びける。

この鉢を御覽遊ばして時頼公、

時頼「コレ二階堂、いつも雪景色を見て、歌の一首も詠む其方が、何故憂

ひを催し、目に涙を浮かめつるぞ」

二階「ハ、ツ御目に觸れ恐れ入り奉ります、格外御痛はしのこと、存じ、

思はずも落涙を仕りました次第でござりまする」

時頼「ハ、ハ、ハ、淋しいことを申すな、昔の筵に草枕、夕の露や朝の雨に

身を打たれ、雪風寒きその中を、庶民の容子を探らんと、釋尊の御弟子
となつて、諸國を巡る我身の上、是は素より覺悟のこと、決して心配に
は及ばぬ、サア早う山本の里へ参らうぞ」

二階「ハ、ツ勿鉢至極もござりませぬ」

主は家來を家來は主を、互に勵み勵まされ、

お供を致す雪の中、歩まうとすれば背後より、

曇りし聲を張り上げて。

「オ——イ、オ——イ、旅の御出家、オ——イ……」

ど、頻りに呼ぶ聲が聞えますから、振り向いて見ると、一人の男、雪を蹴

立て、此方を指して参ります、

「何事であるやらん」

ど、主従は足を止めて待つて居ります、聽て近きました右の男、

男「御出家様、伺ひまする」

二階「ハイ何でござる」

男エ、「此の向ふの茅屋へ、只今お立寄りに相成りました、御出家方ではござりませぬか」

二階「ア、如何にも、此の向ふの佐野源左衛門殿と云ふお方の宅へ、チヨツと立寄りましてござる」

男「左様でござるか、手前がお訪ねに預かりました、佐野源左衛門と申す者でござります」

二階「ハ、ア、御身が佐野源左衛門殿でござるか」

源左「ハイ、左様にござります、立歸りましたら妻なる者が、御出家兩人が大雪の御難澁、宿をお頼みでありましたけれども、所夫の留守ゆゑお断りを申上げたとの事でござりますから、お氣の毒と存じ、お後を慕ひ罷り越しましてござります、お宿を仕りたく、御立戻り下されまするやう」

時頼「イヤ、夫れは忝うござる、然らばお言葉に従ひお願ひ申す」
源左「お荷物は手前が持參を致します、サア斯うお出であそばせ」

と、源左衛門は兩人の荷物を取つて肩に掛け、先に立つて案内を致し、立戻りましたる己れの宅、

源左「コレヤ、御出家を御案内申したぞ」

女房「是れは能うこそ御出家様、先刻は御無禮を仕りました」

時頼「イヤ、折角の志、一夜の宿の御無心、誠に忝うござる、お蔭で寒さが凌げまする」

女房「サア御洗足をあそばせ」と、

言ふ間程なく持ち出す、

汲んで草鞋の紐を解き、

足を洗つて我が君を、

圍爐裏の側に坐を設け、

少し離れて二階堂、

微温の湯には水盥、
脚絆を取りて二階堂、
いざやと言へば時頼公、
主個源左と對座、
威儀を正して控へたり。

此の時源左衛門は燃わて居ります薪木を残らず圍爐裏の中より庭へ投り出してしました、これを見て二階堂は「ハテナ、寒さに堪へかねた我等



佐野の鉢木

三〇六

主従、結構な焚火に取煖して頂かうと思ひしに、皆な焚火を投げ出して了ふとは、合點行かじ』と思ひながら見て居りますと、源左衛門は塩を持つて来て圍爐裏の中へ撒きまして、庭へ下りると薪木を別に持つて参りまする、その薪木にも鹽を撒り掛けて、その上で圍爐裏の中へ入れまして、燈火を打つて再び燃しつけます、聽て下手に座り時頼公に對ひ、

源左『私共は陋苦しき火に取煖り居ります、此の圍爐裏に御僧方を取煖せ申しては甚だ無禮と存じ、御覽の通り只今清めましたるこの焚火、卒ざ御緩容と御取煖下され、御休息下し置かれまするやう』

時頼『イヤ是れは御念の入りました、忝き御待遇、然らば取煖して戴き申さん』

と、兩人は心中に感じながら取煖つて居ります、そのうちに女房白妙が、女房『何も差上げます品とでもなく、お粗末ながら粟の飯を差上げたう存じます、御僧様のお口に適ひ申すまじけれど、お召上り下されまするや』



と問はれて時頼公、

時頼『雪道を辿りて空腹を覺へ候へば、忝う頂戴いたすでござる』

左様ならばと持ち出す、

丸木の箸や香の物、

いざ召上れと差出す、

月雪花を友として、

盧生が夢の束の間と、

これもうきねの假枕、

主従深く悦びて、

召上るこそいたはしき。

漸く夕餐の仕度も了りまして、時頼公は常世に對ひ、

時頼『さて主人、思ひ掛けない御待遇に預かり、忝うござる、是れにて雪の寒さも忘れて、寛ぎましてござる、見受け申せば、奥室には、弓矢、

薙刀、鎧櫃もござる容子、彼れは御身様の所持の品々でござるか、但は

他人のを御預かりでござるかな』

佐野の鉢木

三〇七



と、浪人の常世を知りながら、そしらの顔にて御尋ねに相成りました。

源左「是れは、思ひ掛けなき御尋ね、申上げるも耻かしい事には候へども、私所持の品でござる」

時頼「ム、ウ、然らば御身様は是れまで、何方に仕官をして居られた御方でござるか」

源左「お尋ねに預り申上げるも如何、嗚呼がましくも、鎌倉直勤の武士、佐野庄司重常の嫡子、源左衛門尉常世と申す者」

時頼「ハ、ア、佐野源左衛門常世、然らば何か、お身様は日頃何う云ふお心掛けて、斯やうな處にお住居でござる」

源左「仰せに従ひ申上げるも恐れ入ります、仔細あつて浪人仕り二君に仕へるも武士の耻、依て斯るわびしき住居今にも鎌倉に一大事の事あらば、千切れたり云へども、彼の鎧を一着に及んで、錆びたり云へども、薙刀を掻い込み、瘦馬に打跨り、鎌倉へ第一番に馳せ参じ、北條家の御爲は即ち天下の御爲め、一命を棄つる心得で暮し居ります」



時頼「ム、ウ、ア、天晴れなる御心掛の程を承り、愚僧感服の外はござらぬ、失禮なる事をお尋ね申して、何うぞお心に懸け下し置かれぬやう」

源左「イヤ、是れは、御出家の御挨拶、却つて痛み入りました」

時頼「累ねてお尋ね申すは無禮ではござるが、御身は何故御浪人なされしや」

と問はれて常世は、

源左「其の儀は身に落度があればこそ浪人な仕りました」

と云ふうちにも、兩眼に涙を浮かべ居るを御覽に相成り、

時頼「ハ、ア何か入り組んだる仔細のござること、見申す、シテ御身の所領は何れの地にてありしや」

源左「それも故ありて他手に奪られました、これ皆私の不運、今更人を恨むも詮なきこと」

時頼「ム、然らば其の譯を鎌倉にて知れる人がござるか」

源左「されば、其の儀は青砥左衛門藤綱殿が御存知でござる」



☆佐野の鉢木

話はなしに時刻ときも移うつり來きて、
凍こりがちな冬ふゆの夜よの、
枕まくらに就つかんと思おもへども、
物思ものおもはしげなその容よう子こ。

やがて源左衛門げんざゑもんは時頼ときより公こうに對むかひ、

源左げんざ「御僧ごそう様さま方がた、折角せがくお呼び止とどめ申まし、お宿やどは參まゐらせましたなれど、お見み掛かけの通とほりの佗たしき住居すまひ、殊ことに夜よの物ものさへ自由じゆうにならず、唯ただこの寒ふせさを凌しのぐに、晝ひるは草鞋わらじを作り或あるひは筵むしろを打ち、その藁わらの屑くずを取り置き、夫つまをこの圍爐ゐろ裏うらの傍そばに敷しきまして、夜具よぐの代かりとしてその中なかに寝ねみまする我々われら夫婦夫婦、貴僧きそう方がたをお難がたませ申ましたく候まうらへど、他たに夜具よぐとてもなく、依よつてお介意まがなくばその藁わらの中なかにてお寝ねみ下さるやうに」
時頼ときより「ア、イヤ、藁わらは至いたつて清きよらかなもの、之これに過すぎたる臥床ふしどはなれども、我等われらが休やすめば御夫婦ご夫婦の休やすまる、場所ばしよはない、それにてはお氣きの毒どく、御迷惑ごめいわくながら終夜しゆうやお話敵はなしだてとなり、此この處ところにて明あきして戴いたかん」

更たげ行いく空そらの鐘かねの音ねも、
寒ふせさに耐たむぬ主従しゆじゆうが、
主夫しゆうふ婦ふが寝ねもやらず、



源左げんざ「それは誠まことにお氣きの毒どく、なれどもお望のぞみに任まかせてお話相手はなしあてを仕つからん、就つきましては何なにか御馳走ごちそうとは思おもへども、お見掛みかけの通とほり何事なにことも意こころに任まかせぬ只今ただいまの身みの上うへ、これぞ申ます御待遇ごたいぐうも出來でがたく、幸さいはひ拙者せつしや世よに在ありしその時ときに、珍木ちんぼく名花なけわを好このみましたる名殘なごり忘れぬが爲ためめ、日頃ひごろ秘藏ひそくいたし居ゐります鉢木はちぎあり、これを焚たいて御馳走ごちそうな仕つからん、心こころばかりと思おも召めしめせ」

言いふより早はやく起たち上あり、
軒のきに列ならべし三さんつの鉢はち、
日頃ひごろ手入ていれの色いろ見みて、
葉はもなき枝えだに蕾つぼみして、
いとも優やさしき花はなの兄あに、
姿すがたと争あふ櫻さくら花はな、
八千代やちやうだいを經へぬる常磐木とこひばきの、
圍爐ゐろ裏うらの傍そばに持もち來きり、

☆佐野の鉢木

傾かたく窓まどを押お開ひくれば、
梅うめ松まつ櫻さくらの三さん木きも、
やがて開ひかん梅うめの花はな、
笑わらひ初はじめんとせる様さまは、
やがて開ひけば武夫ぶつの、
松まつの緑ろくの色いろ深ふかく、
斯ごとく目出度めでたき三さんつの鉢はち、
年月としづき秘藏ひそくの念ねんを斷たち、



雪うち拂ひ根を抜きて、
焚かんとするを時頼公。

惜氣もなくに伐り割りて、

時頼「アイヤ御主人暫くお待ち候へ、見受けるどころ何れとして枯木はな
く、皆生きくとして、やがて笑はん梅の花、櫻も松も芽を含み、かねて
のお手入れ御秘藏の鉢木と存する、それを無惨々々伐り棄て給ふこと痛
はしく存する、それよりは思ひ止まりて、やがて咲き出づる時を待ち候
へ」

言はれて常世は頭を振り、

源左「折角のお止めには候へど、最早拙者の身は埋木にして、又と世に咲
き出づることもあるまじき身の上、承れば釋尊は修行の爲めに雪山に薪
木を探りし故事もあり、今夜御僧にお宿を申せしも、これも假初ならぬ
値遇の縁、一河の流れ一樹の蔭、宿世の契りと思召し、今この三木を焚
き申すは、釋尊が難行苦行の法の薪木とも相成ん、必らずお止めは御無
用でござる一と、



止むるを聞かず三つの鉢、
薪木となせば忽ちに、
煙とこそはなりにけれ、
實に暖き待遇に、
明け行く空は東雲の、
主夫婦に禮を述べ、
鎌倉さして立歸る、
二月中ばも過ぎし頃、
天下の大事諸士來れ、
中に一ト際目立つたる、
妻白妙に別れして、
長刀小脇に抱い込んで、
常世一生の働き振り、

柴諸共に押し投べて、
昨日の榮華も今日の夢、
寒さに堪へぬ終夜、
主従いと悦びて、
まだほの闇き未明、
佐野の渡りを後に見て、
明れば弘長三年の、
諸國に向けて鎌倉より、
お觸れに從ふ人々の、
其の武者振りは源左衛門、
瘠せたる馬に鞭を當て、
鎌倉表に馳せ着ける、
一ト息いたして次の段。

(一〇) 七 卿落

(其の上)

抑も嘉永六つの年、
 北亞米利加の軍艦が、
 浦賀の港に押し入れて、
 願ひ出づれば徳川は、
 辭み歸さん術もなく、
 尙ほ奥深く御坐します、
 叡慮に叶はせ給はねば、
 下し給へど如何にせん、
 許すも國の爲なりと、
 港開いて交易の、

水無月上旬のことかどよ、
 浪蹴破つて相摸なる、
 通商交易許せよと、
 三度四度のことゆるるに、
 急使を立て、九重の、
 主上に伺ひまつれども、
 異人を討ての勅諭、
 時の大老直弼が、
 長崎横濱函館の、
 業を始めし夫故に、



恐れ多くも宸襟を、

うたでやむ時ならなくに唐衣

いつまで仇に日を過すらん

惱め給ひて畏くも、

とぞ詠じ給へば敷島の、
 花にも優る武夫が、
 卒ざ事あらば徳川を、
 古に復しまつらんと、

大和心の山ざくら、
 此處に彼處に現れて、
 倒して天下の政治、
 奮む心の健氣さは、

實に勇ましくぞ見ねにける。
 さて時は文久三年八月の十三日、我が維新史で有名なる、大和行幸御親征の御詔勅を仰出しに相成り、又同月十六日には供方の姓名を御發表に相成り、いよ／＼近々には鳳輦を進め参らせ、大和國樞原神武天皇の御陵に詣で、夫れより錦の御旗を翻へし、東都の空へ押寄せ、横濱の異人を討ち拂はうと云ふのが即ち表向で、その内實は幕府に油断をさせて置いて、只一戦に揉み潰さうと云ふ御計畫を遊ばされたのでござります、サア是れに依

つて勤王無二の人々は、

八千代の椿優曇華の、

天にも昇る心地して、

散るを覺悟の丈夫が、

踏みも迷はぬ武者草鞋、

股立高く玉禪、

兜の星を輝かし、

いとも美々しき打扮に、

飾り立てたる光景は、

花咲く時は來にけりど、

君に捧げし我が命、

盡す心の一筋に、

確と八ッ乳の緒をぬめて、

鎧の袖はヒラ／＼、

いでや明日は接戦と、

槍薙刀や弓鐵砲、

吉野龍田の花もみぢ。

是れぞ三條中納言實美卿が指揮を致します御親兵と申し、諸國の大名一萬石に付て一人づ、朝廷守護の侍士として、數多家中の内より撰拔て京都へ上しましたる、忠良の臣ばかりでござります、尤も此の人々は、三條公の指揮を受け、錦の御旗を翻へして、攘夷の先鋒を勤むる人々でござりまするが、尙ほ此の外に諸國の浪人とは云へど、各々心を通じ、天下の政

治を矯め直さんとするもの幾何百人ありましたことは、改めて申上ぐるまでもなく、今尙明かで諸君御存知のことでござります、斯く大和行幸に付いて、御供を申付けられ、錦旗を翻す大義に従ひました人々のうちには、幕府の臣は一人も混つて居りませんでした、いよいよ近日旗揚げと、何れも生唾汁を呑み込んで、勇氣凛々として、觸れば切れる勢ひにて、京都梨木町の三寶院の里坊を、大和行幸の事務所に充て、皆それ／＼用意を致して居ります。

中にも一ト際目立つて勇みかへり、満面に微笑を含みながら、肩胛を聳らせ、いよいよ近日に徳川を相手に、腕と刃の續くだけ、斬つて／＼斬り捲り、土佐武士の手腕を見せて呉れんと、力みかへつて居りますのは、是れぞ土佐の高知は山内家の臣、土方楠左衛門殿と覺わたり（是れ現今の伯爵土方久元閣下でござります）續いて石州津和野の藩士福羽文三郎、肥後國は熊本藩士轟武兵衛、同じく宮部鼎藏の諸士、何れも御用掛りを申付けられて、夜を日に繼いで、旗印、或は親兵の肩章など、一々之れを温ね



て、御調製になつて居ります、時に土方楠左衛門殿は満面に微笑を含み、
 土方「アイヤ、藤、宮部の御雨所、愉快な事ではござらぬか、茲まで漕ぎ
 着けた上からは、最早船は港へ入り込んだも同様、近々にはお互は腕を
 揮つて、死骸の山の其の中を、血草鞋踏んで働くこそ、豫ての望み成就
 いたしましたと申す者、武士に生れた甲斐ぞあり」
 轟「如何にも土方氏の仰せの通り、此の兩三日は肉躍り骨動いて、生血
 が涌き、何んとなう心勇ましく、寝る事が出来ない」
 土方「如何にも御意の通りでござる」
 と、互に悦び勇んで、

小籌大策漫紛々、一舉誰能掃海氛、聖慮焦思無晝夜、微臣爭不効、

忠勤

と、吟聲高く劍の舞を躍らんとした其時、土方殿は、
 土方「少時お待ち候へ、十分のものは九分まで乗り附けたとは云へど、未
 だ事成就したるにあらず、若も此の由關東に洩れ聞えなば、夫れこそ一



大事であるから、成る可く静かに仕たまふこそ宜からう」

制しますれば一同は、

打ち頷いて顔と顔、

心得たりと目で知らず、

さてもく世の中は、

何に譬へん飛鳥川、

昨日の淵は今日の瀬と、

變り行く世の有様は、

兎角釣瓶の片上り。

餘り世間の容子が騒々しくなりましたゆゑ、佐幕黨の人々が手を入れて調
 べて見れば、全く此度大和行幸の御親征の御企圖、是れ由々しき一大事出
 來と、上を下への大混雑と相成りまして、此の旨残らず幕府に内通に及び
 ました、是れが爲に佐幕黨の人々は、手を入れ、人を以て、大和行幸をお
 取止め申上げずんば、夫れこそ天下の一大事なりと、苦心を致し居りまし
 たうちに、茲に天下の奇才傑物と言はれました、會津藩の廣澤富次郎と申
 す人、

廣澤「各々方、其の大役を何卒拙者にお任せに預かりたい、身不肖ながら
 一策を廻し、此のお勅命を撤回して御覽に入れん、御安心ありたい」

と言はれて佐幕黨の人々は、

○「然らば萬事御貴殿にお願い申さんが、して如何やうにめさる思召か」
廣澤「されば、細工は粒々仕上げを御覽じろ、臨機應變、即妙頓智は胸の
裡にあり、さらばでござる」

と、直様、手代木直右衛門、秋月悌次郎の兩士を引き連れ、當時長州藩に
對して、不平滿々たる薩摩藩の有力者、奈良原幸五郎、高崎佐太郎の兩士
を訪ねに参りました、其時兩人は、廣澤を首め、右三名を手厚く扱ひ、豫
て設けある密談の部屋に入り、凝議數刻に及びました、如何なる事を相談
いたしましたか、夫れは今に分つて参ります。

時は八月十七日、

會津薩摩の兩兵士、
四邊を拂ふ勢ひは、
威儀を正して御参内、
尙奥深き御座所にて、

夜は白々と寅の刻、
左右前後に従へて、
是れぞ中川宮朝彦親王殿下に在す、
恐れ多くも九重の、
龍顏拜し奉り、



奏上せしは何事ぞ、
重々取調べ候ふに、
詣でたまふに事を寄せ、
聖駕を奪ひ奉り、
京都は焼野の原となし、
倭人共の謀略、
夫れこそ天下の一大事、
尙だ明けやらぬ東雲に、
言葉静かに謹んで、
少時御思案あそばさる。
夜光の珠にも曇りあり、
懸かる時こそ是非なけれ、
中川の宮に對はせられ。
「然らば卿國家の爲め宜きに計らへよ」

六七 卿落

三二一

大和行幸の儀に就て、
表面は畝傍の御陵に、
其の内實は途中にて、
長州の萩に移し参らせ、
幕府を長州に置かんが爲め、
其の陰謀に乗らせたまうては、
依つてお諫め申さんと、
推して参内仕り候と、
申上げれば帝には、

天津日嗣も浮雲の、
委細を知召めたまはねば、

と、即座に勅命が下りました。是れに依つて中川の宮はお下りになり、佐幕黨の首領に此の由を申傳へました。サア之れを承はつて徳川方に昨方の銘々は、占めたどばかり悦んだ、官軍の勢ひを取り挫ぐが爲め、夫々手配りを致しました。此の計らひは全く廣澤富次郎が、奈良原幸五郎、或は高崎佐太郎と牒し合せた計略でございます。

今まで沈みし佐幕黨、勇氣俄かに百倍し、機先を制して、備前以下、

召された兵は十一藩、

御門々々を取り固め、

槍薙刀の武者矢來、

蟻の這ひ出る穴もなし、

勝てば官軍敗ければ賊、

狹霧深く立ち罩めて、

今日は八月十八日。

ソレと言ふ間に九重の、大筒小筒を掛け列べ、固め詰めたる有様は、一夜に變る勇氣凛々、定めなき世の秋の空、東の空の尙だ晴れぬ、

轉る話は京都梨木町、御親兵の總督たる、三條中納言實美卿の御門前へ、遠しく乗込んで参りましたのは、御勅使鳥山河内介殿、

○開門、開門

と呼ば、る聲に、三條家の家來は喫驚いたし、飛び出で、門を左右に開き、玄關の方にお出迎ひ申上げ、また一方には奥の一室に参りまして、三條卿の前に兩手を支へ、

家來「恐れながら我が君様、只今御勅使とあつて、鳥山河内介殿御越しに相成りました、此の儀如何取計らひませうや」

實美卿は之れを聞き、眉を擡めて、

實美「ナニ、鳥山殿が、畏き邊よりの勅使とな」

家來「ハ、ツ」

實美「ム、ウ……何は兎もあれ、無禮なきやうに御案内申せ」

家來「ハ、ツ」

玄關開いて奥殿へ、案内に連れて閑雅に、



入り來つたる御勅使、
あそばされたる其の折柄、
遙か末座に手を支へ。

實美「時ならぬ御勅使、詔意の趣き是れにて承はらん」

此時鳥山は懷中より取出だしたる服紗包み、恭しくも押し披き、最ど嚴かに讀み上げたり、

勅使「思召に依つて、參内并びに他人而會無用の旨、仰せ出だされ候なり、依つて此由申入れん、謹んでお請けに及ばれよ」

言はれた時に實美卿、ハツと平伏し、少時言葉もなかりしが、

實美「ハ、ツ、繪言汗の如しとやら……」

大御心は背かれず、
誠忠無二の方ながら、
釋迦に提婆の例とやら、
思ひ遣られて哀れなり。

御傷はしや中納言、
月に村雲花に風、
盡す誠が顯れず、



實美「ハ、ツ、お勅命の趣き、正に承知仕り候ふ、お役目御苦勞に存じま

する」
最も叮嚀なる御撻按に、折目を正して鳥山も御氣の毒とは思へども、
役目なれば是非もなし、暇を告げて其儘お歸りになりました。

後に残りし中納言は、少時御思案の躰でござりましたが、

「ハテ、氣遣はしい事共なり、是れ全く大和行幸の御内意が、徳川方に

洩れ聞わ、奸策を廻らして、畏れ多くも陛下の聖明を覆ひ奉り、我々勤

王黨一味の者を押し入れん爲めに相違なし、ア、儘ならぬ浮世かな」

と、世の成行きを恨み、少時御思案の折柄、御所の方に當つて、ズドー

ンと響いた一發の砲聲が耳に這入りました故に、中納言様は「ハテ、何事

であらうか」と突起上り、奥座敷より表正面の小高き處に立出で、籠手を

翳して能く見れば、市中は俄かに騒々しく、老若男女の人々が往來を

致す、其の中に心に懸かるは、武士共は何れも甲冑を身に着けて、駈け行

く有様に、中納言驚きたまひ

實美「コレヤ」

家來「ハ、ツ」

實美「誰かある、御所の方に當り、彼の砲聲は何事であるか、取調べて参れよ」

家來「ハ、ツ、委細畏りましてござります」

と、一人の家來は表の方へ立出でましたが、稍少時すると引返して参り、

家來「恐れながら申上げ奉ります」

實美「ム、何事ぢや」

家來「只今御所の御門を取調べましたところ、武装を嚴重に仕ました兵士等、宮門の固めを致し、また何人と云へども、お召しにあらざれば参内を許す事相成らぬとの儀でござります」

と言はれて、三條中納言殿、

實美「ム、ウ、すりや最早佐幕黨の銘々が、勤王無二の士を遠ざけ、御所の固めを致せしか、無念」

と一聲、御落膽の御容子。

折柄表の方よりも、

肩で風切りドシ〜と、

唯一撃に致さうと、

顔色變じ血を注ぎ、

入り込み来ました此の武士は、

土方楠左衛門とこそ覺わなれ

夫れに續いて、長州の目下、肥後の轟、宮田、宮部の人々も、三條卿のお

館の玄關に掛かり、

「恐れながら只今洛中の容子一變いたし、九門の固め〜も他手に奪はれ、悪人蔓り善人を押し込めんと致す容子、此儘に打棄て置きます時は、如何なる陰謀を企てんも計り難く、是れ由々しき一大事、斯かる時に當つて、禁裏守護を仕らんと差置かれたる御親兵、況してや三條卿には其の總督の任にあれば、一刻も早く我々一同を召連れられ、御沙汰

を御待ち候はんより、推して御參内あそばされ、倭人輩を遠ざけたまふやう、御取計ひ願ひ奉ります」

悲憤の涙止め敢へず、
嬉しき色が頬に出で、
心残りはなけれど、
天の時なら是非もなし、
自由にならぬ我が身の上、
飛び立つやうに思へども、
如何に詮方術もなし。
願ひますれば中納言、
能く參つたぞ皆の者、
斯かる不運に立入るも、
最早勅勘蒙りし、
網代の魚か籠の鳥、
進退維に谷まれば、

實美「事荒立て、は違勅の罪、必ず周章るところでない、穩かに勅許の時を待つて、國家の柱石となるべき大切の身上、其方等の真心確と承知を致したぞよ」

と、見下したまふ御顔に、露か涙か村時雨、お側に控へし一同も、同じく其の御心根を察し奉り、思はず、知らず、霞の涙ハラ／＼ハラ、少時言葉

もなかりしが、や、あつて一同は聲を揃へ、

一同「されば切めては是れより、鷹司關白殿下のお屋敷へ參られて、事の次第をお尋ねに相成つては如何でござりまする」

實美「ム、ウ、然らば汝等の勸めに任せ、一應鷹司關白殿に對面なさん、一同用意を致しませ」

一同「ハ、ツ、心得ました」

と、言ふ間ほごなく御用意が調ひました。

折柄追々集つて參りまする人々、何れも御親兵として腕に覺ねのある人々ばかり、槍薙刀に弓鐵砲、得物々々を携へて、さしもに廣き中納言殿のお館の内は、立錐の餘地もなき有様でござります、誰言ふごなく、ウワア、ウワア、ウワツと申出だすのを、流石は三條中納言様、

實美「一同の者、靜かに供をせよ」

と、お制しになりました、是れに依つて一同は

一同「ハ、ツ」

ど、皆静肅に馬の前後左右を取巻いて、

梨木町を後に見て、橋の通りを南へ、堺町なる御門内、参りますれば逸早く、東久世の少將通禧卿、四條の侍從隆調卿、錦小路右馬頭頼徳卿、首めどいたし長州の、一門吉川馨物の、石より堅き赤心を、勇む心の武夫が、仇に寄せ来る雲霧を、犯せし罪はなけれども、

繰出だしたは京極の、丸太町をば西に折れ、關白殿のお館に、我れより先に來て居るは、續いて西三條中納言季知卿、壬生修理權太夫基修卿、澤主水正宣嘉卿を、毛利讃岐守元純や、其手に續く人々は、君と國とに盡さんと、盡す誠忠も如何にせん、拂ふ術なき身の不幸、身に降りかゝる災厄の、

其の善惡を糾さんと、互に仔細を尋ぬれど、

關白邸に集まりて、分らぬ儘に一同は、

折柄茲に大内より、鷹司關白殿へ、早速参内いたすべしとの御沙汰がござりました、驚いて關白殿には早々参内の用意を致す、此時三條卿は鷹司殿に打ち對ひ、

實美「我等一同参内お差止めと相成り、且御用向きもお差止めにござります、如何なる事情にや合點参らず、何卒殿下参内の上諸卿を召されて、篤とお調べの上、少しも早くお赦しを蒙るやう、御執成し下し置かれた

一 町摩に頼み入れました、關白殿は、

鷹司「委細心得て候ふ」

と、早速我が屋敷を後に見て、御参内に及ばれました。後に残つた七卿の方々、或は毛利吉川の銘々、今に殿下がお下りになれば、

宮中の御模様も分るべし、吉報如何にと一同は、待ち受け居らる、折りも折り、アラ怖ろしや、鷹司邸の表御門の方に當つて、俄かにドツと揚げたる鯨波の聲、

「ハテ何事ならん」

一同は起ち上り、表の方に現れ、籠手を翳して能く見れば、今堺町の御門前へ、ドツと寄せ來ましたのは、會津藩、薩摩藩、何れも嚴めしき扮装にて、長州の兵に折ち對ひ、

會津「ヤア、今朝より再三再四御命令を以て、此の堺町の御門を引渡すべき由を申付けあるに、夫れにも拘はらず御門を我々に引渡さず、お許しもなく御門の固めを致すとは、大内に恐れある事を知らざるか、早速御門を明け渡し、汝等此場を立去れば宜し、強つて言ひ條に應せざれば、腕と刃の續くだけ、片端から撃取つても御門を受取らん」

と、會津薩摩の兩兵は、腕に撚を掛け、槍薙刀を追取り、鎧兜や陣羽織、寄らば斬らんの居合腰で以て押寄せて參りました。

長州勢は此の体を眺め、

長州「黙り居らうぞ、白痴者奴、虎の威を藉る狐とは汝等の事なり、今朝より度々のお勅命とは、是れ汝等の頭共が計ひに依る、偽勅命に相違なし、幕府の尾に附く古狐奴、偽勅命を以て我々を欺かんとは片腹痛し、憚りながら此の長州勢は、一命は鴻毛より軽きに比し、君恩の爲には泰山も輕し、肉を削つて血を絞り、預かつたる御大切の御門、狐狸の汝等に渡して相成らうや、眞の勅命を受くるまでは、此處一寸も動かない、取る覺わがあるなら腕盡くで以て取つて見ろ」

と身構へに及んだ、流石に猛き薩摩隼人、また其頃豪傑と世人に言はれた會津の家來、

會津「何を小癩ッ」

と云ふより早く、各手に身構へを致し、双方筒口を向ける、或は拔身の槍、三尺の秋水を以て互に睨み、最う一二間にて、號令が掛ければ双方より入り亂れて、斬り結ばんと用意を致した、



此時早く彼時遅く、長柄の駕籠に身を載せて、數多の家來に取巻かれ、参りましたは誰あらん、

遙かの方に當つて制止の聲、昇夫四人後や前、行列立派に徐々々、然もお勅使柳原、

中納言光愛卿と覺わたり。制止の聲で先を拂つて参りましたゆゑ、驚きは如何ばかり、

お勅使と聞いて、敵も味方も其の

「ソレ、無禮あつては一大事」

と云ふので、忽ち千才を交へんとして居りましたが、右と左にバタバタと下り、刀を鞘に納め、槍は大地に伏せ、武器を道端に取片付け、兩側に威儀を正して、

「ハ、ッ」

と差控へて居ります、是等が所謂大和魂と申しませうか、二千五百有餘年の間養つて参りました、仁義禮智信、外國の人には真似の出來ない所爲で



ござりませう、何方も平伏を致し居ります、其の前をお通り過しに相成りましたお勅使、鷹司關白殿のお屋敷へお這入りに相成り、早々毛利讃岐守を召され、

勅使「謹んで承はれ、元純、主上此度大和行幸を遊ばさる、事を仰せ出だしに相成りしが、仔細あつて其儀御見合せあらせたまふ、然れども攘夷の事は叙慮確乎として變じたまはず、何れ將軍より其の藩に依頼いたし、近日攘夷の旗を揚ぐべし、依つて一度は堺町の固めは他藩に譲り、速かに兵を引揚ぐべし、是れ全く勅命なり、謹んぞお請けに及ばれよ」

とござりました、

ハツとばかりに胸懐突き、

申渡せば元純は、

少時謹み居られたが、

元純「勅命背き難く、謹んでお請け仕ります、此上は御親兵の總督三條卿を首め、七卿の方々の御勅勘を一刻も早くお赦しあそばされ、また我々共も復職の儀をお許しあらん事を、偏に願ひ奉りまする」

と、最と殿かに頼み上ぐれば、柳原様も氣の毒に思召れ、領いて其儘お引上げになりました。後で長州侯は堺町を預かる家臣一同に對して、御門引渡しの命令を傳へました。

數多家來の人々は、

無念と思へど是非もなし、

縦し百萬の強敵も、

來らば來れ一撃と、

意氣盛んなる兵も、

楯づき難き君命に、

是非も泣く／＼引揚ぐる、

心の無念如何ならん。

さて此方は三條卿を首め七卿の方々、關白殿のお下りを今かくと待ち受けて居りましたが、何う云ふ譯か關白殿にはお下りが無い、其のうちに追々日も傾いて参りました、冷やかな秋風がソヨ／＼と吹く夕間暮、薩藩の兵士、また會津藩の人々は、堺町の御門に入り代つて固めんとする、残念さうに長州兵は主君元純を首め、七卿の方々の身の守護の爲め、引き拂はずして、唯悄然とせる有様、折々穩かならぬ言葉が耳に這入るゆる、三條

實美卿は、

實美「時は棄て措き難き一事である、御所に間近き堺町に於て、若し夜に入つて亂を起せば、帝の宸襟を惱まし奉る段、是れ重罪とや言はん、と云うて殿下の御沙汰もなければ、此處に待ち受けて事變を起さんより、一先は妙法院へ引揚げて、猛る人心を取り鎮め、叡慮を安んじ奉ること、是れ我々の執るべき處置なり、如何でござる、一同」

と、言はれて一同の方々は、

一同「如何にも御有理の仰せ、然らば共に引揚げ申さん」と

縁り出だしたる人々は、

關白邸を後に見て、

元純殿と覺わたり、

先づ眞先は讃岐守、

隊伍を亂さす堺町、

續く家來の人々は、

現れたまふ七卿の、

關白殿の御門より、

其の勢二千五百有餘名、

前後左右を守護いたし、

南を指して進まる、



六七 卿落
常に變りし静かなる、
上は三條實美卿、
皆一様に口を閉ぢ、
駒の蹄の音さへも、
沈み勝ちなる夕間暮、
最ぞ哀れを催して、
囁く袖に置く露の、
身に泌み渡るばかりなる、
曇り勝ちなる東山、
心の月も晴れやらず、
只管たのむ御佛を、
阿彌陀が峰の麓なる、

(其の下)

三三八
其の行列の有様は、
下は僅かな兵卒まで、
顔色さへも尋常ならず、
立てまじものと一入に、
見る人々の目にさへも、
ア、おいとしの事共ど、
散るや木の葉の音さへも、
誰そ彼れ告る鐘の音も、
峰の木の間に分け昇る、
開路を辿る心地して、
祈る心の一筋に、
妙法院にぞ着きにける。



文久三年八月の、
花の京都も秋は尙、
大内山に照る月も、
懸かる時こそ詮なけれ。

中の八日の事かどよ、
夕淋しき風情あり、
仇に寄せ来る浮雲の、

茲に七卿の方々は、阿彌陀が峰の麓なる妙法院に落ちたまひ、尤も客殿の
正面には、三條實美卿、夫れに續いて三條西季知卿、續いて東久世朝臣、
壬生、澤、四條、錦小路の方々、其他、毛利、吉川、益田右衛門、真木和
泉守、森寺大和守、川村能登守、戸田雅樂、久坂玄瑞の諸士、其他土州の
藩士、土方楠左衛門、南部甕夫（今日の樞密顧問官）宮部鼎藏、美玉三平、
其他勤王諸氏の人々、泰然として控へ、尤も廣庭には篝火松明の明り、天
を焦さんばかり、さしにも廣き一室の内、眞鍮の兒雷也卷きの燭臺に、百
目蠟燭を點じ、晝をも欺くばかりにて、寺の四方を最と嚴重に護衛いたし
た人々は、槍、薙刀、弓鐵砲を以て、若も幕府の奸臣共等、弱身に附け込
み、罪なき三條卿を首め、七卿の方々を撃取らんと押し寄せ来る者ある時

は、何奴、此奴の用捨はない、右に首塚、左に胴塚、修羅の術を現し呉れんと、腕に燃かけ、寢刃を合はせて待ち構へたる有様は、鬼をも挫ぐ勢ひなり。

此方は大廣間の内では、三條公を首め、數多の人々御評議あそばされた、

○此の場合何んと致さう、勅勘蒙りし我々の身上、是れと云ふのも幕府のなす所爲、依つて今より河内大和の國境なる、金剛山に立籠り、義兵を擧げて徳川を向ふに立て、一合戦いたさん」と申す者もあれば、或は、

△「事荒立てるより、大御心に叶ひたる御親任深き人々を頼み、我々の冤を訴へ、聖斷を仰ぎ奉らん」

×「是れより直に兵を引率れ、推して参内いたし、君側の奸を拂はん」

と云ふ者もあり、互に口角泡を飛ばし、満面に朱を濺ぎ、議論百出、評議區々にして、容易に一決いたしません

此時正面に在します、

濃厚篤實備はりし、

誠忠無二の實美公、

一座の人に對はせられ、

言葉静かに曰ふやう。

實美「如何に各々方の言はるゝところの説は夫れん、異れども、心は同じ忠義の二字、さりながら兵力を以て参内せば、是れ叡慮に背き、正義を立てんとして不正義を行ふものなり」

妖雲暫く陛下の聰明を蔽ひ奉るとも、

聽て晴れなん日の御光、

暫し忍んで時節を待てば、

雨も日數に限りあり、

必ず周章めさるなよ、

大事は忍の一字に在り、

急いで事を破らんより、

退くところは退いて、

縦し後るゝとも万全の、

策を求めて時を得て、

國と君とに盡すこそ、

誠忠の臣と申すなり。

と、仰せられた儘、少時は言の葉もなく、差俯いて居られました、之れを聞いた座中の人々、血氣に逸る猛夫も、思はず知らず、互に涙ハラ／＼ハ
ラ——ッ、



「ア、斯かる誠忠の公を遠ざけ、佞奸邪智の輩を、大内近く召出だし、代つて任に當てるとは、ハテさて憎き幕府の奸賊」と、

口には言はねども胸の裡、

互に涙呑み込んで、

拇指グツと握り締め、

恨みの眼に血を濺ぎ。

流石騒がしき評定の席も、公が大義名分是非曲直を分けて、仰せられたる言の葉に依つて、唯廣間の内は深々として、更け行く空の秋風も、身に泌み渡る夜半の頃、進み出でたのは、毛利吉川の兩將、三條公の御前に兩手を支へ、

元純「恐れながら申上げます、此上は京都に何時までもお在しましては、御身上が危く存じまするゆゑ、西國へ立去りたまひて、主人毛利大膳太夫ども御協議の上、また然るべきお考へも是れあるべしと存じまするゆゑ、少しも早く長門國へ落支度をあそばさる、やう、願ひ上げ奉りまする」と、

申上ぐれば三條公、

首めと致し七卿は、



是れに御同意あそばされ、其の身支度に取掛かる、妙法院の表より、急いで來る若公は、光源氏の再來か、薄香染めの狩衣、二藍染めの指貫して、最も美々しき扮装は、

長州萩へ落ちばやど、夜は尙だ暗き東雲に、供をも伴れず唯一人、花の顔、月の眉、玉を展べたる美容貌、白き生絹の上衣に、黄金作りを前半に、是れなん三條西中納言、

季知卿の御公達。

此の若公は當時禁中で、第一番の御美男子と稱へられたるお方でござります、案内に伴れて徐々と季知卿の前を通り、兩手を支へ、

若君「恐れながら父君に申上げ奉ります、今や奸臣朝臣に蔓つて、畏れ多くも聰明を蔽ひ奉り、また真心を以て盡せし方々の、其の勳功も顯れず、此儘西國へ下りたまはんこと、却つて汚名を重ぬる道理、願くば西國へ

落ちたまはず、暫し屋敷へお歸りに相成り、御謹慎あそばされ、時節を待って主上のお赦しを受け、大君の爲め、國の爲め、お盡しあそばさる、やう、嗚呼がましくは候へども、お諫め申上げまする』

と、言はれて御父季知卿、
 季知「イヤ、如何にも汝の申すところ、一理ありと云へども、此度の我等の企望、一身一家の事にあらず、御國の爲に心を碎きし事、お咎めを受くるも止むを得ぬ、併し京都に止まつて、若し身に過失を引起しては、折角の志も無に相成る道理、依つて今より西國へ落ちる、事の成否は期し難きも、大義の爲に身を棄つる覺悟、予西國に失せたりと風の便りに聞かる、とも、必ず心を傷められるな、予が志を繼いで飽くまで義兵を擧げて、父が忠義の名前を汚さぬやうにして、屹度御國の爲め盡し呉れよ、假にも道を誤つて、彼れは不忠の臣なりと、世上の口に唄はれて、三條西の家の名を汚す如き事あらば、予は死すとも魂魄は其方に附き添ひて無事には置かぬぞ、コリヤ、和子よ、他に言ひ置く事は更でない、

早く此場を立去れよ、行けよ、和子よ』

と、季知卿、

口には強く言ふもの、

なるやも知れぬ我が身上、

子に迷へるは親心、

お聞きになつたお公達、聲曇らせて父君に對ひ、

若公「仰せの通り御父上、縦ひ此儘落ちたまふとも、和子京都に止まつて、西三條の家の瑕瑾になるやうな、心得違ひは致しませぬども、落ちさせたまふ父上の、御途次が氣遣はしう存じます』

優にやさしき公達の、

忠と孝との兩道を、

花橋の香に匂ふ、

思ひ合はされ哀れなり。

止めるは孝よ諭すは忠、

貫くものは誠にて、

櫻井驛の別れさへ、

さて此の間に朝廷よりは、屢々御使者がお立ちになりました

「率ひるところの兵士は、速かに解散すべし、また外出を禁せられたる朝臣は、直に私邸に歸りて謹慎すべし」

この命令がありました、また各藩に對しては、

「速かに御親兵を引取るべし」

この御沙汰がありました、此時御親兵中の有志者「何れも長州は疎か、九州の果までも、御供仕らん」と、總督三條中納言實美卿まで申上げました、中納言殿は端近くお立出でに相成りまして、

實美「汝等の厚意、應、過分に存ずると云へども、畏れ多くも天皇を警護し奉るべき職分なる其方、此儘我に従ひ落ち行く事は、大義名分に背き、却つて逆鱗の基と存ずる、後日お咎めを蒙るのみならず、汝等もまた同罪に行はれん、直に此場を引去りて、各々藩に立歸り、謹んで朝命を待つて進退を決するこそ宜けれ、尙今日は國家危急存亡の秋、各々自愛自重して、我が大君の爲め國の爲め、盡す誠を忘らるゝなよ」と、お諭しになる言の葉に、

♡ 君子の徳は春の風、

偃かぬ草木もなしとやかや。

承はりし人々は、百萬の強敵も更に怖れぬ人々ばかり、唯感涙に咽び、處々でワツとばかりに聲を揚げて、

一同「勿躰至極もござりませぬ、仰せ御有理に候へども、落ち行きたまふ途次、若も怪しき事あらば、一も取らず二も取らず、何卒御供許したまふやうに」

と、頼み入るゝ人々の中より、進み出でたる一人は、筑後の國、久留米の藩士、兵長の役目を勤めたる、木村三郎と云ふ者、或は高知藩、土方楠左衛門、其他誠忠無二の人々、三條公の前に兩手を支へ、涙と共に、

○「恐れながら拙者共は國許出立の其の砌り、我等の藩主より別けての依頼、汝等は畏れ多くも禁裏守護の爲め、親兵として召出だされ、家の面目、身の譽れ、必ず大君に盡すべき真心を、片時も忘れてはならぬぞ、況して其方等の總督と仰ぐは、百司百官ある中に、智勇を兼ね備へたまひし、三條中納言實美卿なり、皇室無双の御柱石、攘夷の御心最も堅く

在します、汝等今より京都に上り、我に代つて厚く仕へよ、謹んで我が藩の耻辱を遺すなよと、命を受けたお言葉は、今尙東の間も忘れ候はず、餘人は知らず、何卒我々だけを何處の果までも御供を許したまふやう、偏に願ひ奉りまする」と、

真心面に現れて、

願ひ上ぐれば實美卿、

不憫な者とは思へども、

主上の御許しなき者を、

無断で供を許しては、

是れ我儘の振舞と、

潤む眼に聲曇らせ、

一樹の蔭一河の流れ、

數ならぬ身の實美を、

斯くまで慕ひ呉る、とは。

實美「心根に徹して嬉しくは存すれど、

何んど申しても伴れ行く事は相成

らぬ、一度は悲しき別れを致さん、

また會ふ事もあるほごに、

京都に止まり、國に事ある時は、

我に代つて働き呉れよ、

返すくも頼むぞよ」と、

愛別離苦の血の涙、

ハラ／＼ハラと頬に傳ひ、

最ぞ嬉しくは思へども、慕へる者を一々に。暇を取らせましたが、是非ともにとありまする者が、三十人ばかり残りしました。

○「強つてお供を許されずば、腹を切つて冥途の旅に赴き、草葉の蔭より御守護を致さん、御免」

と各々兩肌を脱いで、腹切る用意を致しましたゆゑ。實美卿は之れを止め、

實美「汝等親兵の身を以て、私に一命を棄つるとは、お上の恐れを知らざるか、死は一旦にして易く生は飽くまでも難し、何處までも止まつて、御國の爲に働けよ」

とありましたゆゑ。○「最早一命を棄てる上からは、此世になきものなり、生れ轉つた者と思召し、是非御供を許したまへ」

とあります、強つて許さねば、親兵を脱しても、一步も退かぬ意氣込みでありますから、止むを得ず御供を許されました、是れに依つて七卿の方々



六七 卿落

三五〇

は、長州の家來、或は親兵の人々、三百人餘り四百近くの護衛の人に取巻かれ、衣冠束帯の儘では、途次も目に立つゆゑと、皆夫れく身に支度を變へ、三界無祿の身上なれば、別に憚かるやうもなく、思ひく身に支度を致し、中にも、三條、三條西の兩卿だけは、

白綸子に鳥禱

實に入つ藤の御袴

是れでも他目に立つゆゑに、秋雨の降るを幸ひに、人目を忍ぶ簑笠、白き妙なる御足に、穿きも習はぬ草鞋の、確ご八乳を締めたまひ、うき節繁ぎ吳竹の、杖をばお執りあそばされ、世が世であれば九重の、雲井に近く在しまし、襖の風さへ厭ふ身の、斯かる浮世の例ひとて、御傷はしの有様も、皆國の爲め君の爲めの、
浮き雲のか、らばか、れ神風の、
吹き拂ふべき時なからめや



六七 卿落

三五二

最も哀れに詠みたまへば、
或は甲冑小具足や、
股立高く取るもあり、
何れも雨に濡れつゝも、
妙法院を立出づる、
東雲告ぐる鶏の聲、
別れを告げる人々は、
外に立出であそばさる、
箆に當つてザラ／＼ザラ、
御傷はしの姿にて、
花の京都を後にして、
雲井遙かに歸り来て、
思ひ餘つて七卿は、
笠を脱られて伏し拜む、
續く護衛の武士は、
後顧巻き玉櫛、
總勢凡そ四百餘人、
馬提燈の明りを以て、
然う斯うする間に明けの鐘、
常に變りて淋すげに、
妙法院を後に見て、
サツと吹き来る秋風は、
降り来る雨に梳り、
今日を限りに住み馴れし、
また何時の日か九重の、
我が大君に盡さんと、
篠衝く雨の其の中に、
何れも北は御所の方

涙と共に、

七癩「ハ、ツ」

少時大地に頭を低げて、お別れを申上げた、

其の胸の裡は如何ばかり。

口不能言 眼中血、

延喜の昔 忠臣の、

おもひは同じ思ひなり。

此時長州の久坂玄瑞なる人、混雑せる中に、痛歎の餘り、謠ひて云はく、

世は刈こもと亂れつ、

蟬の小河に霧立ちて、

うらいたましや玉きはる、

實美朝臣 季知卿、

その外 錦小路殿、

旅にしあれば駒さへも、

俯仰天神 與地 祇、
歎きも今は身にかゝる、

あかねさす日の最と暗く、
隔ての雲となりけり、

内裏に朝夕とのるせし、

壬生、澤、四條東久世、

今浮き草の定めなき、

進みかねては嘶へつ、

降りしく雨の絶間なく、

これより海山淺茅原、

難波の浦にたくしほの、

行かんとすれば東山、

朝な夕なにき、なれし、

何んと今夜はあはれなる、

拂ひ盡して百敷の、

時は文久三年の、

尙だ明けやらの東雲の、

憂き節多き伏見の里、

落ち来る水の川の名も、

淀む浮世の例はして、

過ぎて急げる旅衣、

人目を忍び様々の、

涙に袖のぬれたて、

露霜わきて蘆が散る、

からき浮世はものかはと、

峯の秋風身にしみて、

妙法院の鐘の音も、

いつしか暗き雲霧を、

都の月をしめでたまふらん。

八月十八日の、

十九日なる末明、

過ぎて山城近江より、

實に淀川と聞くからは、

よしあし繁き津の國を、

世は落人の悲しさに、

憂き艱難を重ねつ、



六七 柳落
泊りに着いて日に歩み、
毛利の城中に隠匿はれ、
御國の爲に用ひたる、
空にかゝれる雲霧を、
宸襟安んじ奉り、
果の果まで耀かす、
惹起したる柱石、
大和心の山櫻、
語るも聞くも潔き、
拙き節もて讀上げ畢んぬ。

三五四
長き旅路も長門なる、
再び錦旗を翻へし、
思ひ切る刃の太刀風に、
拂ひ盡して大君の、
御稜威限なく外國の、
是れぞ維新の大業を、
後の世までも謳はる、
實に香しきその勳功、
御國の花の一ト巻を、

附言、このお話に就きまして、七卿の方々がお落ちになる途次、攝
州茨木の或家に御休憩遊ばしました砌、中なる御一人、何人様であ
られたかは存じませぬが、お手觸になりました器具は、残らず御取
壊しの上御出立になられたと云ふことを、或人から承りましたが、

是れは何故になされたものであるか、奈良丸には一向分りませぬ、
尙ほ色々お話もござりますが、詳しく申上げられませぬ點もござり
ますので、其邊は宜しく御推讀の程を願つて置きます。

吉田奈良丸氏の浪花節を聴きて

竹園

もさめてもほかにはなけん天の下

聲ふしきもにひさりこの君



吉田奈良丸
十八番講演集
美久仁の花
第二編 終

六七 柳落

三五五

大正元年十月五日印刷
大正元年十月十日發行

正價金五十錢
郵稅內地金八錢

美久仁の花
第二編



著作權所有

著者 吉田奈丸
廣橋廣吉

發行者 末吉賢次郎
大阪市東區博愛町四丁目四十四番地

印刷者 蒲田德之助
大阪市西區立賣堀南通貳丁目二二五番地

印刷所 積善館印刷部
大阪市西區立賣堀南通貳丁目二二五番地

發行所

神戸市兵庫港町
三丁目十四番地

奈良丸會本部

大坂市東區安土町四丁目
發賣所 積善館本店

電話長東一〇三番 振替大坂二九八一番

美久仁の花

第一編 目次

- (一) 秀吉と政宗……………
- (二) 富士の夜嵐曾我物語……………
- (三) 袈裟と盛遠……………
- (四) 吾妻花相撲の立引……………
- (五) 加藤清正毒馒头……………(完)
- (六) 木村長門守堪忍袋……………(完)
- (七) 赤穂千葉三郎兵衛……………(完)
- (八) 安宅關勸進帳……………
- (九) 俠骨一心太助……………
- (一〇) 熊谷須磨の浦風……………(完)
- (一一) 大石内藏助山鹿送り……………(完)

271
92

終



奈良丸會本部發行

